

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第13集

AZAMI

薊

円正坊遺跡群

TSUTA

葛

ZAWA

沢

ISHI

石

長野県佐久市野沢薊沢遺跡・岩村田葛石遺跡発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

# 例 言

1 本書は、県立野沢北高等学校敷地内の特別教室棟及び音楽教室棟建設工事事業、県立岩村田高等学校の昭和62年度電子機械科棟建設工事事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 調査委託者 長野県教育委員会高校教育課

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地籍及び面積

薊沢遺跡 (NAZ) 長野県佐久市大字野沢449-2 400㎡

葛石遺跡 (IET) 長野県佐久市大字岩村田字葛石1248-1 350㎡

5 調査期間

薊沢遺跡 昭和62年9月4日～9月29日、10月1日～昭和63年3月19日

葛石遺跡 昭和62年11月9日～11月25日、11月26日～昭和63年3月31日

6 調査団の構成

事務局 佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 西沢 正己

庶務係主査 畠山 俊彦

庶 務 係 田中 芳美 (臨時職員)

調査団

薊沢遺跡

団 長 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)

調査指導者 林 幸彦、羽毛田 卓也 (佐久市教育委員会)

調査担当者 高村 博文 (佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任)

調 査 主 任 羽毛田 伸博 (佐久考古学会員)

小山 岳夫 (佐久埋蔵文化財調査センター調査係)

調 査 員 篠原 浩江 (佐久考古学会員)

調査補助員 神部 妙子

発掘協力者 北沢 千吉、小林 幸子、宮川 百合子、和久井 義雄 (佐久考古学会員)

整理協力者 小林 幸子、平林 美津江、宮川 百合子、和久井 義雄

地形・地質・石質指導 白倉 盛男 (佐久考古学会副会長)

灰釉陶器鑑定

齊藤 孝正（名古屋大学助手）

葛石遺跡

団 長 黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者 林 幸彦、羽毛田 卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者 小山 岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調査主任 羽毛田 伸博（佐久考古学会員）

高村 博文、三石 宗一（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調査員 篠原 浩江（佐久考古学会員）

調査補助員 神部 妙子

協力者 小林 幸子、平林 美津江、宮川 百合子、和久井 義雄（佐久考古学会員）

地形・地質・石質指導 白倉 盛男（佐久考古学会副会長）

花粉分析 バリノ・サーヴェイ株式会社

- 7 遺物写真は島山が、薊沢遺跡の遺構写真を高村が、葛石遺跡の遺構写真は小山が撮影した。
- 8 本書の薊沢遺跡についての編纂は高村が行ない、執筆は第II章第1節を白倉盛男、第II章第2節を黒岩忠男が担当し、他の章については、高村博文、羽毛田伸博、小山岳夫、篠原浩江がそれぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。葛石遺跡についての編纂は小山が行ない、執筆は第II章第1節を白倉、他は小山が行った。
- 9 本書及び薊沢・葛石両遺跡出土遺物等の全資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

薊沢遺跡において、野沢北高等学校及び島山武市氏等、葛石遺跡において、岩村田高等学校に、発掘調査中、数々のご協力およびご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

青木和明、宇賀神誠司、白田武正、岡村秀雄、河西克造、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、笹沢浩、島田恵子、千野浩、塊 隆、寺嶋俊郎、花岡弘、原明芳、福島邦男、丸山敏一郎、百瀬忠幸、森泉かよ子、由井茂也

（敬省略五十音順）

目 次 挿 図 目 次

目 次

第I章 発掘調査の経緯……………1

第1節 発掘調査に至る動機……………1

第2節 調査日誌……………2

第II章 遺跡の環境……………2

第1節 新沢遺跡付近の自然環境(地形・地質)……………2

第2節 遺跡の歴史的環境……………5

第III章 基本層序……………8

第IV章 遺構と遺物……………12

第1節 検出遺構・遺物の概要……………12

第2節 竪穴住居址……………12

1) 第1号住居址…12 2) 第2号住居址……………19

3) 第3号住居址…21 4) 第4号住居址……………22

5) 第5号住居址…24 6) 第6号住居址……………25

7) 第7号住居址……………27

第3節 土 坑……………29

第4節 ヒット群及び区出土遺物……………31

第V章 調査のまとめ……………31

第1節 遺 構……………33

第2節 遺 物……………34

引用参考文献

高 石 遺 跡

第I章 発掘調査の経緯……………43

第1節 発掘調査に至る動機……………43

第2節 調査日誌……………44

第II章 遺跡の立地と環境……………44

第1節 高石遺跡付近の自然環境(地形・地質)……………44

第2節 遺跡の歴史的環境……………46

第III章 基本層序……………48

第IV章 遺構と遺物……………52

第1節 検出遺構・遺物の概要……………52

第2節 土 坑……………52

1) 第1号土坑……………52

2) 第2号土坑(竪穴墓)……………53

第3節 グリッド遺物……………56

第V章 調査のまとめ……………59

引用参考文献

付 編

後 記

新 沢 遺 跡

第1図 新沢遺跡の位置……………1

第2図 千曲川概土図……………3

第3図 周辺遺跡分布図……………6

第4図 新沢遺跡基本層序模式図……………9

第5図 新沢遺跡地形及び発掘区設定図……………10

第6図 新沢遺跡遺構全体図……………11

第7図 第1号住居址実測図……………13

第8図 第1号住居址コマD実測図……………14

第9図 第1号住居址礎群実測図……………15

第10図 第1号住居址出土土器実測図……………16

第11図 第1号住居址出土土器拓影図……………18

第12図 第2号住居址実測図……………19

第13図 第2号住居址出土土器実測図……………20

第14図 第2号住居址出土土器拓影図……………20

第15図 第3号住居址実測図……………21

第16図 第3号住居址出土土器実測図……………22

第17図 第3号住居址出土土器拓影図……………22

第18図 第4号住居址実測図……………23

第19図 第4号住居址施土範囲実測図……………23

第20図 第4号住居址出土土器実測図……………23

第21図 第5号住居址実測図……………24

第22図 第6号住居址実測図……………25

第23図 第6号住居址出土土器実測図……………26

第24図 第6号住居址出土土器拓影図……………26

第25図 第6号住居址出土土器実測図……………26

第26図 第7号住居址実測図……………28

第27図 第3・4号土坑実測図……………29

第28図 第2号土坑出土土器実測図……………29

第29図 第1・2号土坑、P1～P7実測図……………30

第30図 P8・P9実測図……………31

第31図 A・B地区出土土器実測図……………32

第32図 A・B地区出土土器拓影図……………32

付 図 佐久地方の平安時代環・坑・皿類相對編年図  
佐久地方の平安時代土器器類相對編年図  
佐久地方の平安時代鉢・蓋・長頸瓶及びその  
他の須恵器相對編年図

<b>萬石遺跡</b>	
第1図	萬石遺跡の位置……………43
第2図	周辺遺跡分布図……………46
第3図	萬石遺跡全体図及び全体層序図……………49
第4図	萬石遺跡発掘区設定図……………51
第5図	第1号土坑実測図……………52
第6図	第2号土坑(壺棺墓)実測図……………54
第7図	第2号土坑出土土器実測図……………55
第8図	第2号土坑出土土器拓影図……………56
第9図	旧耕作土出土土器実測図・拓影図……………57
第10図	第VII・VIII層出土土器実測図・拓影図……………58
第11図	第IX・X層出土土器実測図・拓影図……………59
第12図	第VIII層出土土器実測図……………59

図版 六 1 第6号住居址 2 第7号住居址 3 第1号土坑 4 第2号土坑 5 第3号土坑 6 第4号土坑 7 ヒット群 8 P8・P9

図版 七 1~11 第1号住居址出土遺物  
 図版 八 1 第1号住居址出土遺物 2・3 第2号住居址出土遺物 4 第3号住居址出土遺物 5~8 第6号住居址出土遺物 9~11 A・B地区出土遺物

## 付 表 目 次

<b>新沢遺跡</b>	
第1表	周辺遺跡一覧表……………7
第2表	第1号住居址出土土器観察表……………17
第3表	第2号住居址出土土器観察表……………20
第4表	第3号住居址出土土器観察表……………22
第5表	第4号住居址出土土器観察表……………23
第6表	第6号住居址出土土器観察表……………27
第7表	第2号土坑出土土器観察表……………29
第8表	A・B地区出土土器観察表……………32
第9表	新沢遺跡住居址一覧表……………33
第10表	各段階の実年代一覧表……………39

図版 九 1 萬石遺跡全体写真 2 萬石遺跡いー9グリッド層序

図版 十 1 萬石遺跡いー12グリッド層序 2 第1号土坑

図版 十一 1 第2号土坑2~5 壺棺検出状況  
 図版 十二 1・2 壺棺検出後の配石 3 第2号土坑出土土器 4 第VIII層出土土器

<b>萬石遺跡</b>	
第1表	周辺遺跡一覧表……………47
第2表	萬石遺跡出土土器観察表……………60
第3表	千曲川水系壺棺墓集成……………62

## 写 真 図 版 目 次

<b>新沢遺跡</b>	
図版 一	新沢遺跡付近航空写真
図版 二	A地区全景
図版 三	1 B地区全景
2	第1号住居址
図版 四	1 第1号住居址礎群検出状況
2	第1号住居址カマド
図版 五	1 第1号住居址カマド 2 第2号住居址
3	第3号住居址 4 第4号住居址 5 第5号住居址 6 第6号住居址 7 第6号住居址礎群検出状況 8 第6号住居址遺物出土状況

薊 沢 遺 跡

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機

薮沢遺跡は、佐久市野沢に所在し標高約672～673mを測る千曲川により形成された沖積地に位置する。

本遺跡は、昭和62年7月31日、佐久市教育委員会によって試掘調査が実施されており、その結果、第3層と第5層との間の暗茶褐色土層中より平安時代の土師器・須恵器が多量に出土し、遺構の存在が十分予想される。

今回、野沢北高校による特別教室棟及び音楽室棟建設工事が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に発掘調査をし、記録保存する必要性が生じた。そこで佐久市教育委員会が長野県教育委員会高校教育課より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第 1 図 薮沢遺跡の位置 (1 : 50,000 国土地理院地形図による)

## 第2節 調査日誌

9月4日(金) 現地にて、野沢北高校・佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センターの3者が協議をし、9月7日より発掘調査を実施することを決定する。

9月7日(月)～9月9日(水) 遺跡発掘区をA区とB区とし、重機による表土削平作業を行う。

9月10日(木)～9月17日(木) A区、B区の遺構検出作業を行う。標高点の移動を行ない、673.1mとする。

9月17日(木)～9月29日(火) A区、B区の各遺構の掘り下げ作業・実測作業・写真撮影を行い、全体実測、全体写真を撮影して現場での作業を終了する。

10月1日(水)～昭和63年3月19日(土) 室内において報告書作成作業を行い全調査を完了する。

# 第II章 遺跡の環境

## 第1節 薊沢遺跡付近の自然環境(地形・地質・用水)

薊沢遺跡は佐久市大字野沢字本町薊沢、即ち県立野沢北高等学校校地内に所在する。この付近が佐久平のほぼ中心部である。

佐久平は千曲川の最上流部標高700mを中心とした東西最大約10km・南北20kmにわたる長菱形の高原盆地で佐久市がその中央の大部分を占めている。この佐久市の東側群馬、長野の県境は佐久山地と呼ばれている荒船山(1,422m)、物見山(1,375m)、八風山(1,315m)から妙義山(1,104m)と続く奇岩絶壁、風景絶佳な地域で妙義荒船佐久高原国定公園に指定されている。西側はホッサマグナ(日本中部地溝帯)中心部に隆起噴出した赤岳(2,899m)、硫黄岳(2,742m)、蓼科山(2,530m)、霧ヶ峯・美ヶ原台地と続く八ヶ岳蓼科火山列を中心とした八ヶ岳中信高原国定公園が諏訪郡界となっており、両側とも古代からわが国、東西交通の難路として東山道、中山道とその脇街道としての多くの峠路が拓かれていた。東の碓氷峠、入山峠、和見峠、内山峠、田口峠、十石峠、西の大石峠、大河原峠、雨境峠、大門峠、和田峠等々がそれである。北側は活火山浅間山(2,560m)から北へ高峰山(2,105m)、湯の丸山、(2,105m)、烏帽子山(2,065.6m)、四阿山(2,333



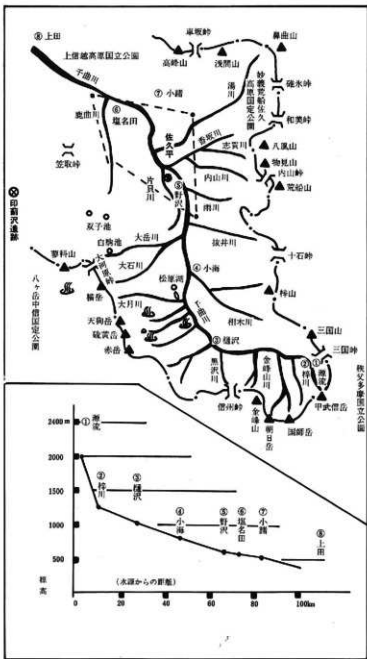
m) などの上信火山帯が続く上信越国立公園がそびえている。

この佐久平の中央を南から北へ多くの支流を集めて千曲川が貫流している。千曲川は東信最東端の埼玉県の県境にある甲武信ヶ岳(2,483m)から発源して北流し、川上村を流下して南佐久郡佐久町付近(750m)に至ると水量を増し谷幅を広げて佐久平に入り、灌漑水を供給して北に向かって貫流し、小諸市布引北方(550m)で小県郡に流出している。

この千曲川の流路を基軸として小諸市から約20km北から南の佐久町までを長軸とし、その中心部佐久市で東西方向に約10kmを短軸とした長菱形の千曲川流域の高原平地が佐久平である。稲作単作地帯ではあるが灌漑水の安定・夏季の晴天日が多いための総日照時間、年2,500時間を越すなど、条件に恵まれて水稲面積当り米収量全国高水準を示し、

しかも質は良質であり、これに関連しての佐久鯉・佐久清酒などの生産では古くから広く知られている。この長菱形の佐久平のほぼ中心部に蕨沢遺跡が立地している。標高は673.1mである。

地質構造の上からの佐久平は①浅間火山噴出物の堆積する北東部、小諸・岩村田地域、②佐久



第2図 千曲川概念図

山地古期岩層周辺の頭部地域南佐久東半部、③千曲川より西の八ヶ岳蓼科山麓部分の南佐久郡西部と北佐久郡西地方の浅科村・望月町・立科町地域に大別区分される。その境界は南北で、ほぼ千曲川の流路であり、①と②の境界は内山川と志賀川が合流して千曲川に注ぐ滑津川の示している東西線で旧南佐久と北佐久郡の境界の断崖線でもある。(第2図参照)

①は小諸市・御代田町・佐久市の北半部の平坦地で、わが国で最も若い火山浅間火山の第四紀の火山噴出物—塚原泥流・軽石流・追分火砕流—の火山灰・火山砂・火山礫・浮石・火山弾の堆積地帯で未分解透水性は良好であるが粘性、凝結性の乏しい火山性壤土が地表を被っている。そのために流水に対する抵抗力は頗る弱く、この地帯は流水による火山麓地帯特有の水蝕地形「田切り」地形が浅間山頂を中心として放射状にまことに美事に発達している。信越線御代田駅付近・平原駅付近・小諸横古園内の深く垂直に近い深い谷がその典型である。

②は佐久市南半部南佐久郡の千曲川以東の町村の平地部分で、佐久山地の秩父古生層・中生層・新生代第三紀層地帯を侵蝕谷がよく発達し、谷口扇状地、洪積堆積層分布地も含まれている。肥沃土壌層は厚いが段丘や傾斜地が多い。

③は北佐久郡御牧村、小諸市の一部、望月町、立科町、浅科村、佐久市西部、南佐久郡白田町、佐久町の西半部地域の八ヶ岳蓼科火山山麓平地で火山基盤の集塊岩は佐久平周辺まで到達し洪積層と合わさって台地状地形を作っている部分もあるが火山溶岩の露出はなく、山麓緩斜面は厚いローム層に被われている部分が多い。縄文遺跡が発見されているのもこの段丘台地面で佐久平周辺部は耕作適地土壤に恵まれている。

薊沢遺跡は、この千曲川以西、佐久市南部の佐久平中心部に位置し、千曲川本流より約1km西の沖積地の帯状微高地、自然堤防上の野沢北高校学校校地内である。ここは野沢北高校建設の明治40年以前は本新町取出伊勢遺儀田長明塚と続く微高地の自然堤防の末端にあたり、この一連の地帯は最近まで畑地が多かったが農耕地基盤整備事業によってその面影は見ることができなくなった。薊沢付近は明治34年県立野沢中学校創立にともない、現在地に基礎整地校舎建設が行われ、その後も校舎武道場、寄宿舎、便所等の増移築が繰返され、その基礎工事による表層土の移動があり、廃土埋立ての跡も今回の発掘調査の深掘りトレンチの断面で確認された。幸にも現遺構確認面以下は擾乱されていなかった。これらの観察と周辺の調査から、この付近は佐久平中心部の沖積氾濫原の堆積地帯で自然状態の遺構確認面以下の地層は上部から黄褐色の砂質細粒粘土層が40cm内外の厚さで堆積している。この堆積層理状態から氾濫静水の沈殿層と観察された。その下部は大小の円礫を多数に含む砂礫層が観察され、50cm以下は確認することができなかったが数メートルの厚層であることは付近の古井戸から推定される。これらをあわせて堆積状況と大小の円礫の交混から、長期の洪水氾濫堆積によるものと考えられる。大小の円礫を岩質別に多いものから列記すると、安山岩・集塊岩(八ヶ岳火山系)・チャート・硬砂岩・砂岩・粘板岩・輝緑凝灰岩・

石英閃緑岩・流紋岩・その他（佐久山地古期岩層地帯産）であって量の多い八ヶ岳火山系のものが数多く大型で、佐久山地産のものは小型で数も少い傾向は佐久市内を流れている千曲川原の現河床礫とほとんど同率で大差は認められない。

これらの堆積当時の状態を考えると千曲川の大洪水大氾濫期が長く続き流路は至る所を移動し上流からの八ヶ岳・佐久山地からの多量な大小各種の砂礫を佐久平一面に溢流堆積したもので各所に自然堤防なども形成した。流水量の変化により流路がほぼ安定した以後も時には大洪水の濁流のみが自然堤防を溢れて濁水を充たした細砂粘土をその上部に堆積して、この付近の水田耕作面が形成されたものと解釈される。佐久平の中心部野沢平のこの辺は水田適地で土壌も肥沃であり、古くから用水施設も完備され、米の多取地帯で10アール当り600kg平均の平年作が続く、冷旱害もない天恵米作最適地であった。鎌倉時代以来伴野庄領主伴野氏の平時の居館趾が野沢町古屋に現在も保存状態よく残されているが、その土居土堀の外側の堀の水として千曲川から引水したものであると伝説される用水が八ヶ用水と呼ばれ、臼田町稻荷山下から取入れられ、完備した水路を安定して流入して高柳、鍛冶屋、取出、本新町、野沢、原村、跡部、三塚の八部落の佐久平中心部全面をうるおしている。

（白倉）

## 第2節 遺跡の歴史的環境

藪沢遺跡は、千曲川西岸の臼田町稻荷山を扇頂とする略々三角形の沖積地の標高約672～673mを測る帯状微高地上に立地している。佐久市教育委員会が実施した佐久市遺跡詳細分布調査報告書によると、野沢平を中心に帯状微高地及びそれに接する西側の山脚部には縄文時代からの遺跡が濃密に分布している事が何われ大規模の集落址が埋蔵されているように思われる。

縄文時代の遺跡では、本遺跡西方約2km付近の台地上に後沢遺跡（23）が所在し、昭和51・52年度の発掘調査に於て、弥生時代の集落址と複合して縄文時代竪穴住居址9棟を検出し、遺物には関山・黒浜式土器・石鏃・石錐・石斧等を多く出土している。又、前山の滝下遺跡（28）、象ヶ岡遺跡（29）、小宮山の西の張遺跡（25）等も縄文中期・後期・晩期等の土器類、石器類が見られるが、発掘調査された遺跡でなく、田畑の耕作の際の発見・表面採集での資料で、住居址などの遺構は確認されていないが、大沢・前山・根岸と続く蓼科山系の東端部は扇端になるが故に湧水による飲料水を得られ易く、片貝川や林野の豊富な狐場を控えた自然的条件を伴ない、相当な規模の集落址が埋蔵されている事が縄文時代中期を主とする多量な資料が物語っている。

弥生時代になると、片貝川流域の低湿地に臨んで地帯に稲作技術の導入に伴い本格的に人々の定住が始まるようになり、大沢・前山・根岸へと続く山脚部や帯状微高地上に弥生時代の遺跡分布が見られる。前山の後沢遺跡（23）は前記の昭和51・52年度に発掘調査が行われ、弥生時代後



第3図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

期竪穴住居址35棟・方形周溝墓等を検出し、箱清水式土器・太形蛤刃石斧など多量の遺物が出土しており、弥生時代後期の大集落址として著名である。小宮山の西の張遺跡(25)は古墳時代・奈良時代の遺跡と複合するが箱清水式土器を、岸野の北裏遺跡も弥生中期栗林式土器、後期箱清水式土器、有孔円盤、石庖丁、偏平片刃石斧、太形蛤刃石斧、磨製石鏃などの遺物を豊富に出土させている。また、前山の滝の下遺跡(28)・尾垂遺跡(31)等からも箱清水式土器・石斧・土製品が出土している。帯状微高地では昭和初期に八幡一郎氏により桜井町田遺跡で弥生中期の「町田式土器」として注目された土器が出土している。その他、弥生時代後期の遺跡として三塚の一町田遺跡(13)、前山の大門下遺跡などが知られている。

古墳時代では、三塚町田遺跡(8)が昭和49年度発掘調査により後期(鬼高期)竪穴住居跡1棟を検出し、三塚市道遺跡(10)は昭和49年度発掘調査により中期(和泉期)竪穴住居址2棟・後期住居址7棟を検出し、白玉・碧玉製管玉・土製勾玉等を出土させている。三塚三塚遺跡(14)は昭和48年度発掘調査により、後期住居址2棟を検出している。また、三塚町田遺跡に隣接する跡部町田遺跡(9)は昭和50年度の発掘調査で後期住居址5棟を検出している。古墳時代の象徴とも言える古墳は、居住地周辺に位置し儘田古墳・長明塚古墳・平馬塚古墳・大沢城山古墳群等

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	区分No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
					縄	弥	古	奈良	平安	中	
1		扇沢遺跡	野沢449-2	微高地				○	○		本遺跡
2	421	長明塚遺跡	野沢字長明塚	＊			○	○			
3	423	東五葉田遺跡	野沢字東五葉田・餅田・梨の木	＊					○		
4	425	野沢館跡	野沢字居館敷・北田・北仁田・館敷	＊					○	○	城郭
5	329	跡部徳田遺跡群	跡部字徳田・内田	＊			○	○	○		
6	422	金山遺跡	跡部字金山	＊			○	○	○		
7	324	平島塚遺跡群	坂井字平島塚・石堂・西屋敷・東屋敷・南屋敷・四十九・橋跡・上の田・町田	＊	○		○	○	○		
8	331	三塚町田遺跡	三塚町田	＊			○				昭和49年度発掘調査
9	332	跡部町田遺跡	跡部町田	＊			○				昭和50年度発掘調査
10	418	市道遺跡	三塚字市道	＊			○	○	○		
11	418-1	市道遺跡	三塚字市道	＊			○				昭和49年度発掘調査
12	417	三塚東遺跡群	三塚字三塚東・榎田	＊			○	○	○		
13	413	一町田遺跡	三塚字一町田	＊	○	○	○	○	○		
14	419	三塚三塚遺跡	野沢字東野沢田	＊			○		○		昭和49年度発掘調査
15	420	比道遺跡	野沢字比	＊					○		
16	424	藤田遺跡	野沢字藤田	＊			○	○	○		
17	424-1	藤田遺跡	野沢字藤田	＊			○	○	○		昭和45年度発掘調査
18	495	伊勢道遺跡	取出字伊勢道	＊				○	○		
19	489	高畑遺跡	本新町字高畑	＊			○				昭和44年度発掘調査
20	494	白拍子遺跡群	白拍子・置敷・給作・備前	＊				○	○		
21	412	中道遺跡	前山字中道	＊		○		○	○		
22	412-1	中道遺跡	前山字中道	＊					○	○	昭和46年度発掘調査
23	490	後沢遺跡	小宮山字後沢	古地	○	○	○	○	○		昭和51・52年度発掘調査
24	496	町の後遺跡	前山字町の後	低地					○	○	
25	494	西の張遺跡	小宮山字西の張	平地	○	○	○	○			
26	416	前山城跡	小宮山字城山・伴野城隈	山麓					○	○	城郭
27	497	居屋敷遺跡	前山字居屋敷	平地					○		
28	498	龍の下遺跡	前山字龍の下・敷ヶ岡	古地	○						
29	499	敷ヶ岡遺跡	前山字敷ヶ岡	＊	○				○		
30	411	倉沢遺跡	前山字倉沢	山麓					○		
31	472	尾巻遺跡	前民字尾巻	＊	○	○	○	○	○		
32	414	三塚橋田遺跡	三塚字橋田	微高地					○		昭和50年度発掘調査

が所在するが、しかし、古代から現代にかけての生産の拡大に伴って破壊されたり、盗掘などの被害を受け当時の状態を保っていない現状である。

奈良・平安時代になると、遺跡分布は更に濃密となる。本遺跡北側の市道遺跡(11)で平安時代の住居址1棟、三塚三塚遺跡で平安時代住居址1棟、儘田遺跡(17)で平安時代住居址5棟、中道遺跡で奈良から平安時代住居址5棟と和同開珎・三彩陶器が出土し、三塚鶴田遺跡(32)で平安時代住居址4棟を検出している。

文献上の記録についてふれると、平安時代における荘園をめぐる問題や、寺社・地方郷族等興味ある事象が内在しているが「和名抄」の佐久八郡の中にこの野沢は何れに属したか、刑部郷であるのか?、また荘園としては?、「東鑑」に「信州佐久郡伴野野野野郷業師寺」の文字がある。「北条記」にも建治二年一遍上人信州伴野に至り踊躍念仏を脩す云々とある。これらを見ると、この地域は伴野荘(院領)に属していたものとも考えられる。また、大沢の地家(寺家)に長命寺が平安時代にあったとされる伝承は、十二坊をもつ程の大寺であったが、天正年間の兵火にかかったとされている。仁王門址が残っているのも注意すべきであろう。条里的地割については今のところ、この地域では確認できないが、「一丁田」「五反田」「美里在家」などの地名も興味もたれる。藪沢遺跡の歴史的環境について狭義の範囲・地域に限定して概観したが野沢地区を中心とする古代史解明の上で、藪沢遺跡は他の遺跡と共に重要な役割りを果たすものと考えられる。

(黒岩)

### 第三章 基本層序

藪沢遺跡は千曲川の左岸、片貝川と千曲川に挟まれた中間地点に位置している。第II章第I節藪沢遺跡付近の自然環境で述べたように露出した円礫の分析から千曲川によってもたらされたものがほとんどであることから、千曲川によって形成された氾濫原で自然堤防上に立地するものと考えられる。標高は673.1m付近を測る。

#### 藪沢遺跡B地区基本土層

第I層 表土 校舎建築の際の埋土

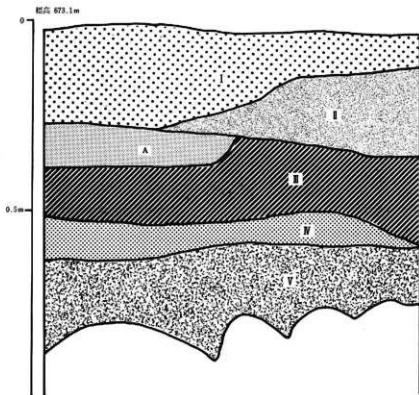
第II層 7.5YR 4/2 灰褐色土層 粘性・しまりあり。粒子細かく、小礫を含む(耕作土)。

第III層 10YR 5/6 黄褐色土層 赤茶褐色砂粒と微粒子粘土の混ざり、粒子細かく、しまりあり。

第IV層 10YR 6/3 におい黄橙色土層 砂粒主体、粒子粗い。

第V層 10YR 5/2 灰褐色土層 黄色砂粒、褐色砂粒が混じる円礫層。

藪沢遺跡の発掘調査区内には、校舎建築及び破壊の際の攪乱が多く検出され、攪乱をまぬがれた地区においても、千曲川の氾濫の影響が激しく、基本層序ではB地区のみしか掲載しなかったが、A地区においては第1号住居址が検出された7列以東は、

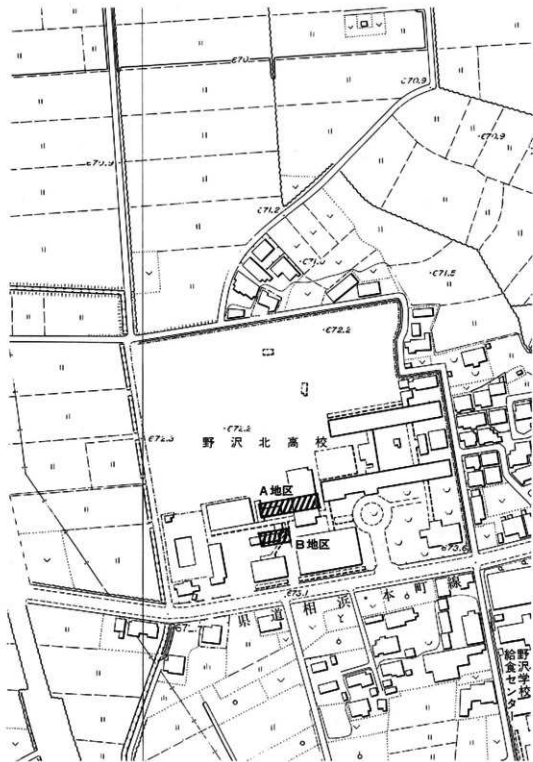


第4図 藪沢遺跡基本層序模式図

第V層の円礫層が表土を除くとすぐ直下にあられており、7列以西は、第二章第1節で述べたように千曲川の氾濫静水の沈殿層と思われる第III層が存在する。また、この第III層は第4号住居址付近になると黄褐色が暗黄褐色に変化し、遺構覆土との見分けが困難になる。第IV層の砂粒主体層はB地区の東端部分に部分的に見られた層である。

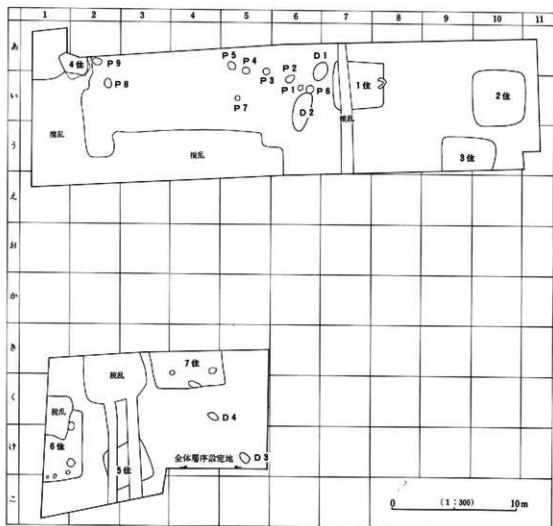
遺構確認面は、A区において第2・3住が第V層上面で、第1住が第III層と第V層境目に存在することから、それぞれの層の上面で、第4住、第1・2号土坑、ピット群は第III層の上面で検出された。B地区において検出された第5～7住及び第3・4号土坑はいずれも第IV層上面で確認された。

(高村)



第5図 野沢遺跡地形及び発掘区設定図





第6図 新沢遺跡遺構全体図

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 検出遺構・遺物の概要

#### 検出遺構

- 竪穴住居跡 7棟 1・3・4・7住（平安時代前葉）、2住（奈良時代?）、6住（奈良時代末～平安時代初頭）
- 土 坑 4基（第2号土坑、平安時代）
- ピット 9基 時期不明

#### 出土遺物

- 土 器 土師器（奈良～平安）……………甕・坏・椀・皿  
須恵器（奈良～平安）……………壺（?）・坏・高台付坏  
灰釉陶器……………皿
- 鉄 器 鉄鎌・刀子 （高村）

### 第2節 竪穴住居址

#### 1) 第1号住居址

##### 遺構（第7～9図、図版三～五）

本住居址は、調査区A地区内北端中央付近のあ・いー7・8グリッド内に位置し、全体層第III層黄褐色土層上面と一部第V層灰黄褐色礫層中において検出された。他遺構との重複関係は認められないものの、近代の建築基礎か用水路と思われる溝により攪乱を受けており、西壁寄りを南北一直線に32～80cmの幅で壁と床面が破壊されている。平面形態は南北356cm、東西357cmを測り、かなり正確な隅丸方形を呈し、床面積は13.0cm<sup>2</sup>を測る。カマドを軸とした主軸方位はN-95°-Eを示す。

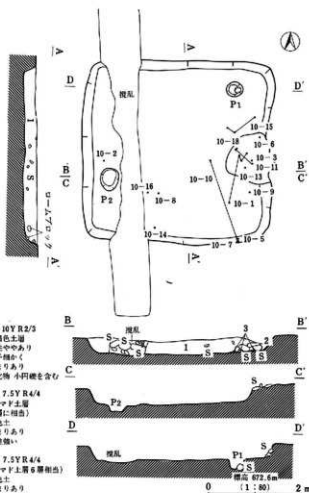
覆土は三層に分割されるが、第2・3層はカマドに関係する土層である。第1層は黒褐色土層で粘性はややあり、粒子細かくしまりがあり、炭化物と小円礫を含んでいる。第2層は褐色土層で粘性が強く、しまりがあり、カマド第3層に相当する。第3層は褐色土層で粘性があり、しま

りがある。これはカマド第6層に相当する。尚、残念ながら土層断面図に表現することはできなかったが、住居址北東部に床面より4~10cm浮いた状態で長辺8~25cmの角のとれた礫が多数混在していた(第8図)。これらの礫群と同レベルで、P<sub>1</sub>上から7cm幅で長さ6cm大の炭化材が1片のみ出土している。まとまった炭化材は他に観られないが、住居址覆土第1層中に炭化物を含むことも考え合わせて、本址が焼失住居址であった可能性がある。

確認面からの壁高は、24.5~32.0cmを測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁体は基本的に掘り込み層である黄褐色土層を利用して構築している。床面も黄褐色土層を利用しており、西側にやや傾斜するがほぼ平坦で、北東コーナーから南壁攪乱溝の手前にかけて踏み固められ、中でもカマド吹き口付近は特に

堅固である。しかし、カマドから東南コーナーにかける約1m真角の範囲は、壁体中程から床面全面にかけて円礫がほとんど透き間を持たずに露出しており、他と様相を異にしている。これは、床面がほぼ同一レベルであることや、調査区A地区において本址以東に位置する遺構確認面が全体層序第V層灰褐色土層であることなどを考慮すると、第V層が本址東南隅辺りから存在することが考えられる。また、北東コーナーの覆土に混在した多数の礫群に関しては多々推測できるが、本址埋没の際に流れ込んだ第V層の円礫である可能性もあろう。

柱穴は2個検出されたが、支柱穴と連断はできない。覆土は住居址覆土第1層のみである。P<sub>1</sub>は北東コーナーに位置し、平面形態は径約35cmのほぼ円形を呈し、深さは22cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面に拳大よりやや大きめの石が埋まっている。P<sub>2</sub>は南西コーナー付近に位置し、平面形は40×47cmのやや楕円形を呈し、深さは13cmを測る。断面形はやはり逆台形を呈する。

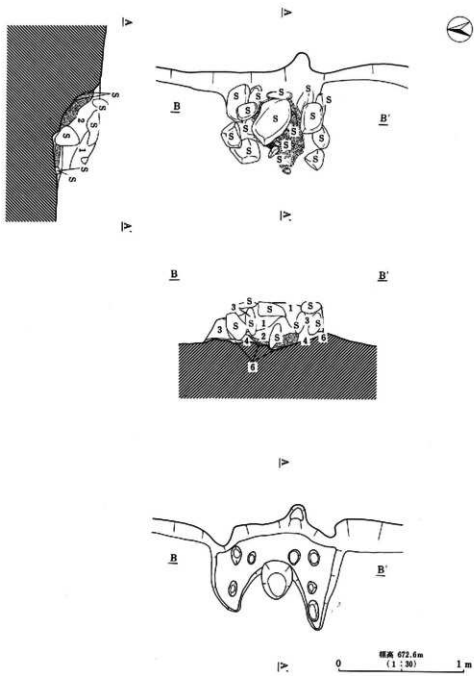


第7図 第1号住居址実測図

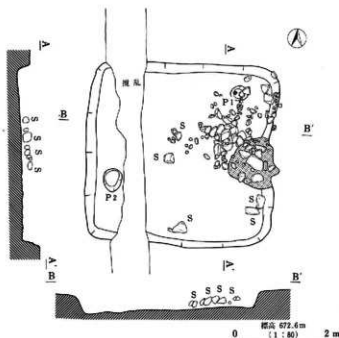
1. 10YR2/3  
三褐色土層  
粘性ややあり  
砂子細かく  
しりりあり  
炭化物 小円礫を含む

2. 7.5YR4/4  
(カマド土層  
3層に相当)  
粘性なし  
しりりあり  
粘性強い

3. 7.5YR4/4  
(カマド土層6層相当)  
褐色土  
しりりあり  
粘性あり



第8図 第1号住居址カマド実測図



第9図 第1号住居址竈部実測図

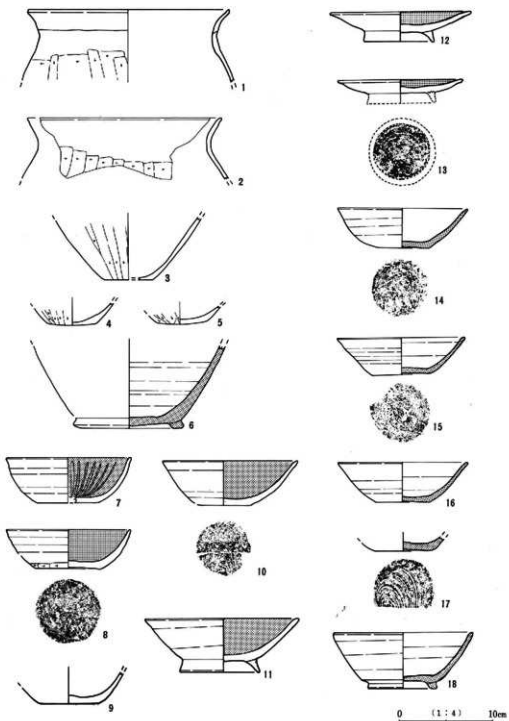
カマドは東壁中央よりもやや南寄りに位置し、主軸80cm、袖部幅86cmを測り、主軸方位は真東を示し、残存状態は良好であった。煙道部は東壁中央を緩い山形状に掘り込み、カマド奥壁に沿って緩やかに立ち上がる。袖石は左に三個、右に四個をそれぞれに一列に配されていた。これらは、円礫を含有する灰黄褐色土層を約2cmの高さで袖部に沿い帯状に掘り残し、更に袖石を配する箇所のみ4cm程掘り窪め、石をやや外傾気味に立て掛けるようにして、周囲を粘性の強い

カマド第3層褐色土と第6層褐色土で外部を覆うように補強している。ここに、円礫を多く含み、深く掘り込むことの困難な土質に対する工夫が窺われる。天井石は、平面形、厚さがそれぞれ、 $25 \times 34 \times 8$  cm、 $50 \times 83 \times 22$  cm、 $34 \times 48 \times 19$  cm大の平面楕円形をした石を掘石の上に乗せており、透き間は粘性の強い第3層褐色土で掘石同様に補強されている。火床部は壁下の床面を上面 $25 \times 30$  cm、底面 $14 \times 18$  cmの楕円形に約5cm掘り窪め、焼土は5~18cmの厚さで堆積していた。

遺物の出土状況は、カマドを中心として北東部に強い集中が認められ、北西部においては極めて希薄である。10-1・3は、カマド内焼土下、10-2はP<sub>2</sub>付近覆土下層、10-4は掘乱溝であるが、本址との関連が強いものと思われる。10-5・7は南東壁に接して覆土上層、10-6・11・13は、カマド内で、6は掘石補強材であるカマド第3層中、11・13は火床面直上のカマド第2層、10-8・16は中央よりやや南壁寄りの覆土下層、10-9・15は、カマド北側脇の床面、10-10はカマド焚き口付近の床面、10-12は、カマド付近覆土上層、10-14は南壁西寄りの壁下床面、10-18は、カマド焚き口付近覆土下層よりそれぞれ出土している。(篠原)

#### 遺物 (第10・11図、図版七・八)

本住居址からは土師器・須恵器が出土している。土師器の器種には甕・環・碗・皿があり、須恵器の器種には壺(?)・環・高台付杯がある。この内、図化できたものは21点(実測図18点、拓影図3点)である。



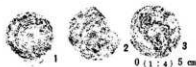
第10图 第1号住居址出土土器实测图

第2表 第1号住居址出土土器観察表

調査 番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
10-1	土師甕	(21.2) < 7.50 —	口縁部緩やかに外反する。	内) 口縁部ココナデ、胴部ナデ調整。 外) 口縁部ココナデ、胴上部横位と縦位のヘラケズリ。	昭和実測B No.4・85・86・91 色調7.5YR4/6 (褐色)
10-2	土師甕	(21.6) < 6.40 —	口縁部やや「コ」の字状に外反する。 口縁部の器内はやや厚くなる。	内) 口縁部ココナデ。 外) 口縁部ココナデ、胴上部横位のヘラケズリ。	昭和実測A No.19 色調10YR4/6 (褐色)
10-3	土師甕	— < 6.40 (5.11)	平底	内) 板状工具によるナデ調整。 外) 縦位のヘラケズリ。	昭和実測B No.92、カマド 色調7.5YR4/6 (褐色)
10-4	土師甕	— < 2.30 5.2	平底	内) ナデ調整。 外) 縦位のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。	完全実測 色調7.5YR4/6 (褐色)
10-5	土師甕	— < 1.50 5.4	平底	内) ナデ調整。 外) 斜位のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。	昭和実測A No.1・2 色調7.5YR4/6 (褐色)
10-6	須恵皿 ?	— < 8.70 11.4	胎り付け高台。	内) ロクロココナデ。 外) 胴部厚さ目成形の後クロココナデ、底部周縁ヘラケズリの後ナデ調整。	昭和実測B No.82 色調5B 6 (暗青灰色)
10-7	土師杯	13.2 4.8 (6.4)	口辺部強く内弯し、頸部外反する。	内) 黒色地埋。確文風合へラミガキが放射状に施こされている。口縁部ココナデヘラミガキがみられる。 外) 口辺部ロクロココナデ、底部回転ヘラケズリ。	昭和実測B No.1・2 色調10YR4/3 (にじみ黄褐色)
10-8	土師杯	(13.2) 4.2 7.0	口辺部内弯外反する。器内埋い。	内) 黒色地埋。口縁部ココナデヘラミガキ 外) 口辺部ロクロココナデ、底部回転未切りの後再調整。底部及び底部周縁ヘラケズリ。	昭和実測A No.15 色調7.5YR5/6 (明褐色)
10-9	土師杯	— < 3.20 6.2	平底	内) 黒色地埋。 外) 底部回転未切り。	完全実測 No.5 色調10YR5/6 (黄褐色) 器内胎子含む。
10-10	土師杯	(14.4) 4.7 5.6	口辺部弱く内弯する。	内) 黒色地埋。口縁部ココナデヘラミガキ。 外) 口辺部ロクロココナデ、底部回転未切り。	昭和実測A No.2・62 色調10YR5/6 (黄褐色)
10-11	土師碗	16.4 5.7 8.3	高台付杯。口辺部弱く外反する。	内) 黒色地埋。口縁部ココナデヘラミガキ。以下は器面が荒れている。 外) 口辺部ロクロココナデ、底部回転未切りの後胎り付け高台。	完全実測 No.83・90、カマド内 内外面共に磨耗著しい 色調7.5YR4/6 (褐色) 器内胎子含む。
10-12	土師皿	14.7 < 3.10 (7.4)	高台付皿。板状の皿部を登する。	内) 黒色地埋。タテヘラミガキ。 外) 口辺部ロクロココナデ、胎り付け高台。底部回転未切り。	完全実測 色調10YR4/4 (褐色) 器内胎子含む。
10-13	土師皿	13.1 < 1.40 —	高台付皿。板状の皿部を登する。	内) 黒色地埋。内面・寛れていて観察不能。 外) 口辺部ロクロココナデ、底部回転未切りの後、胎り付け高台。	完全実測 No.87 色調10YR5/6 (黄褐色)
10-14	須恵杯	13.8 4.2 5.4	口辺部僅かに内弯する。	内外面共にロクロココナデ。底部回転未切り。	昭和実測A No.14 色調7.5Y6/2 (灰オリーブ色)
10-15	須恵杯	13.5 3.95 6.8	口辺部やや直縁気味に外反する。	内外面共にロクロココナデ。底部回転未切り。	昭和実測A No.88・70・71 大樽。内面スス付着。 色調5D6/1 (青灰色)
10-16	須恵杯	(13.6) 4.2 (5.6)	口辺部僅かに内弯。頸部で僅かに外反する。	内外面共にロクロココナデ。底部回転未切り。	昭和実測B No.54 色調10B 6/1 (青灰色)
10-17	須恵杯	— < 1.50 6.2	平底	内外面共にロクロココナデ。底部回転未切り。	昭和実測B 色調GY6/1 (オリーブ灰色) 焼成不良
10-18	須恵高 台付杯	14.7 6.0 7.1	高台付杯	内外面共にロクロココナデ。底部胎り付け高台。	昭和実測A No.90、カマド内 色調5D6/1 (青灰色)

土師器甕は、いわゆる武蔵型甕で器肉が薄い特徴ある甕である。これらの甕は全器形を知り得る個体はなく、図化できたのは口縁部から胴上部2点、底部1点の3点のみである。

10—1・2とも明瞭な「コ」の字状口縁を呈していないが、図化できなかった資料に明瞭な「コ」の字状になる口縁部が数点出土している。武蔵型甕以外の甕は出土していない。



第11図 第1号住居址出土土器拓影図

土師器杯は平底のロクロ調整されたもので、内面黒色処理された杯がほとんどである。内面黒色処理されない小片が2点存在するが、磨減が著しくあるいは黒色処理されていたかもしれない。今後、この時期の内面黒色処理杯に関しては、火熱により脱色するという特性を考えにいれながら、注意して土師器杯の観察を行なっていく必要がある。10—7は底部成形あるいは回転糸切りにより行われたかも知れないが、回転ヘラケズリの再調整が加えられているため明らかではない。内面は黒色処理が施され、暗文風のヘラミガキが間隔を小さくおいて放射状になされている。10—8は底部回転糸切りの後、底部及び底部周縁をヘラケズリにより再調整を行っている。外面ロクロ痕が明瞭に残り、内面は黒色処理されている。10—9は内面黒色処理がなされており、外面底部は回転糸切り痕は観察できるものの、他は磨減が著しく観察できない。

土師器碗10—11は、やや長めの三角高台を貼り付け、杯部はやや内弯しながら外傾するが、直線的である。内面は黒色処理されているが器面は荒れている。

土師器皿は、ほぼ平坦に近い10—13とやや深みのある10—12が出土している。兩個体とも内面黒色処理されており、10—13は、高台が取れていないものの三角高台がつけられていたものと考えられる。10—13の底部は回転糸切り痕が明瞭に残っているが、10—12の底部は回転糸切りの後ナデによる再調整が加えられているものと思われ、糸切り痕はわずかに観察できる。

須恵器杯は図化（拓本を含めて）できたのは、7点であるが、破片を土師器と比較すると須恵器杯の量がかなり多く、土師器（内面黒色土器）の占める割合は多くなっているが、須恵器杯がまだ主体となっていたと考えられる。図化した須恵器杯の底部成形は、すべて回転糸切り未調整であるが、離し糸切りと明瞭にわかる個体が10—15、11—3の2点見られる。

須恵器高台付杯は、断面台形の高台を貼り付け、口縁部が広がり、なだらかに外傾している。この時期より古いタイプの高台付杯は、外傾角度が急で箱型に近いものであり、その意味では、土師器高台付碗からの影響か、形が変化しており、この時期の標徴となるかもしれない。

この他、須恵器で高台の付いた壺になると思われる胴下部が出土している。

以上、第1号住居址出土土器は良好なセットとして捉えられる一括土器であり、第V章で述べるように、須恵器杯AⅡがまだ主体であり、内面黒色土器碗A・皿Bが存在することなどから、平安時代第1段階新相の時期と判断する。

(高村)



## 2) 第2号住居址

### 遺構(第12図、図版五)

本住居址はA地区  
あ・い—10グリッド内  
に位置し、上面は校舎  
建築の際、削平を受け、  
全体層序第V層灰褐色  
土層上において検出さ  
れた。他遺構との重複  
関係はないものの、西  
壁中央と東壁中央より  
40cm程内側に校舎建築  
の際の土台石が設置さ  
れたため、西壁中央と  
床面の一部が破壊を受  
けていた。

平面プランは南北  
390cm、東西391cmを測

り、北壁長346cm、南壁長300cm、東壁長359cm、西壁長378cmの南東コーナーは隅丸を呈していないが、全体として略隅丸方形を呈し、北を中心とした主軸方位はN—2°—Wを示す。

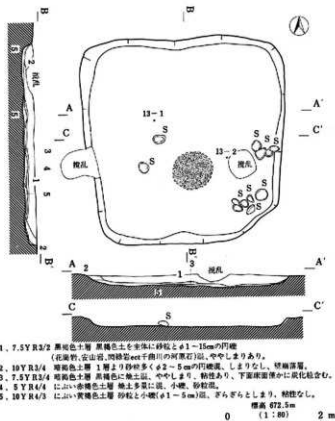
覆土は残存している部分で三層に分割でき第1層は黒褐色土層で砂粒・川原石の混ざり、第2層は壁崩落層であり、第3層は暗褐色土層に焼土が混ざり、僅かに炭化粒・炭化物を含む層で床面中央に不定形に広がり、4cm前後の堆積をみる。床面を皿状に掘り込み、その充填土である第4層はにぶい赤褐色土層で焼土を多量に含み、この遺構の性格を知る1つの手掛りになるものと思われる。

床面は第5層にぶい黄褐色土層に砂粒と小礫の混ざる土を平坦にならした面で、やや軟弱であった。壁残高は15~20cmを測り、壁体は軟弱で緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

東壁中央壁下と南東コーナーに集まっている川原石は床面より0~15cm上にあり、これらの集石の性格については判明できなかった。

ピット・カマド・壁溝は検出されず、本遺構は竪穴状遺構とも考えられる。

遺物の分布は量的に少なく、床面に散在しており、特に集中する傾向は見い出せなかった。



第12図 第2号住居址実測図

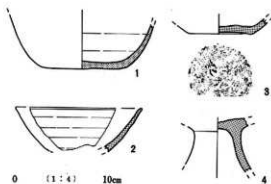
遺物 (第13・14図、図版八)

本遺構からは土師器、須恵器が出土しており、図示し得たのは須恵器の7点(実測図4点、拓影図3点)のみであった。器種はいずれも小片であるが須恵器の甕・長頸瓶・坏、土師器の甕・小型甕・坏等があげられる。

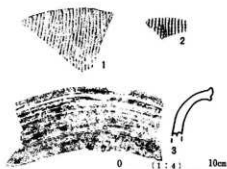
13-1は底部から胴下部の部位で、底部はヘラケズリがなされており、器肉は薄く、強い立ち上がり有し、内面ロクロヨコナデが施されている。須恵器甕と考えられるが、他の器種の可能性もある。13-2・3は須恵器坏である。2は口辺部内弯外傾し口唇部で外反する。3は焼成不良の底部で回転糸切り(離し糸切り)の坏である。13-4は須恵器高坏の脚部である。拓影図14-1・2は擬格子目状の叩き目文の残る須恵器片で、2は器肉薄く(3mm前後)、色調褐色で焼成不良と考えられるが、小片のため器形を知り得なかった。14-3は須恵器甕の口縁部であり、1と同一個体の破片と思われる。口唇部に1

条の沈線を有し、口縁部叩き目成形の後ロクロヨコナデが施され外反し、口唇部内面では垂直気味に立ち上がる。

その他、図示し得なかった土器に、土師器薄手の胴部にヘラケズリの施されている甕(武蔵型



第13図 第2号住居址出土土器実測図



第14図 第2号住居址出土土器拓影図

第3表 第2号住居址出土土器観察表

検出 番号	器種	流量	成形及び器形の特徴	調 型	備 考
13-1	須 恵 不 明	- < 5.0 9.0	平底、内弯気味に立ち上がる。	内) ロクロヨコナデ。 外) 底部周縁十字刻痕、表部ヘラケズリ。	回転実面A No.12 色調5DG/1 (緑青灰色)
13-2	須恵器 坏	(13.4) < 4.5D -	口辺部内弯気味に立ち上がり、口縁部彫痕 かに外反する。	内外面ロクロヨコナデ。	破片実面A No.1 色調10Y6/1 (灰色)
13-3	須恵器 坏	< 1.0 6.5	平底	底面離し糸切り。	回転実面B 焼成不良 色調7.5Y6/2 (灰オリーブ色)
13-4	須 恵 高 坏?	- < 5.0 -	脚部	内外面ロクロヨコナデ。	完全実面 I区 色調10BG6/1 (青灰色)

甕)と小型台付甕の破片、内面黒色処理の施された坏、椀、須恵器では回転糸切りの坏以外は底部へラケズリの坏が1点出土している。また、肩部に二条の平行線文の施されている破片が出土しており、長頸瓶の破片と考えられる。

以上、本遺構の所産期を決定する資料は乏しいが、須恵器坏で回転糸切りと底部へラケズリの施される坏の共存することや、武蔵型甕の口縁部が「コ」の字状になっていないことなどから、あるいは奈良時代になる土器群かもしれない。(羽毛田伸博)

### 3) 第3号住居址

#### 遺構 (第15図、図版五)

本遺構はA地区うー9・10グリッド内に位置し、上面は校舎建築の際に多く削平を受け、全体層序第V層灰褐色土層上において検出されたが、南半分が調査区外のためと、床面中央と校舎建築の基礎が南北に走っているため、床面はほとんど破壊され、全容を知り得なかった。

平面プランは計測できる所で、北壁長約389cm(推定)を測るのみであり、他の壁長、主軸方位等は測定不能であった。

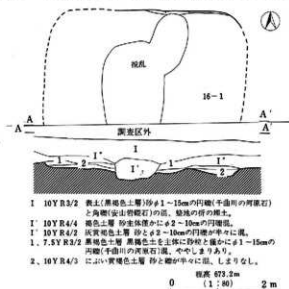
覆土は残存している部分で二層に分割でき、第1層黒褐色土層は砂粒と川原石の混ざりの層でややしまりを有す。第2層にふい黄褐色土層は砂粒と川原石がほぼ半々に混ざった砂礫層で、掘り方の埋土であり、第2層の上面が床面と考えられる。床面の状態は所々に固くしまった所が観察できた。

壁残高は上面がほとんど削平されているため0~10cmを残すのみであり、壁体は軟弱であった。また南半分は未調査であるが、ピット・カマド等の痕跡が認められず、竪穴状遺構とも考えられる。

遺物の分布は、本住居址の全プランが把握できないため、速断はできないが、量的には極めて少なく調査区内において散在し、特に集中する傾向は見い出せなかった。

#### 遺物 (第16・17図、図版八)

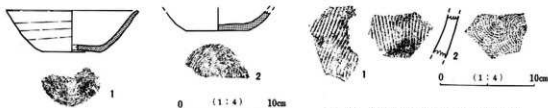
本遺構からは土師器・須恵器が出土している。そのうち図示し得たのは4点(実測図2点、拓影図2点)のみであった。須恵器の器種には壺あるいは甕・坏、土師器で



第15図 第3号住居址実測図

第4表 第3号住居址出土土器観察表

検出 番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
16-1	須恵器 環	□14.0 4.4 6.3	口辺部僅かに内弯して立ち上がる。	内外面にロクロコナテ。 底部回転糸切り。	回転実測B No.6 色調5BGS/1 (暗青灰色)
16-2	須恵器 環	— < 2.0 (6.6)	平底	内外面にロクロコナテ。 底部回転糸切り。	回転実測B 色調5B4/1 (暗青灰色)



第16図 第3号住居址出土土器実測図

第17図 第3号住居址出土土器拓影図

は内面黒色処理された環、薄手の甕（武蔵型甕）が出土した。

16-1・2はいずれも須恵器環で底部回転糸切りである。17-1・2は須恵器甕の破片と考えられ、1は内面ナテ調整、外面平行叩き目文が残り、2は内面同心円文、外面擬格子目状の叩き目文が観察できる。その他、図示し得なかったものの中で底部ヘラケズリの須恵器環がある。土師器環破片は、いずれも黒色処理が施される。また、小片であるが内面黒色処理された高台付皿がある。土師器甕は薄手の胴部ヘラケズリのなされたいわゆる武蔵甕破片であり、中に1点口縁部が僅かに「コ」の字状を呈すと思われる破片が含まれている。また、須恵器において頸部が強くびれ短頸壺になるとと思われる破片も数点出土している。

以上、本遺構からの出土遺物は乏しく、所産期を決定するには不十分な土器群ではあるが、「コ」の字状を呈する武蔵甕、須恵器環の底部が回転糸切りが多いことなどから平安時代前葉としておきたい。  
(羽毛田伸博)

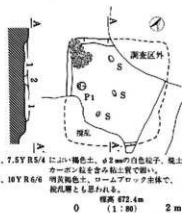
#### 4) 第4号住居址

##### 遺構 (第18・19図、図版5)

本址はA地区の北西端、あ・い-1・2グリッド内に位置し、全体層序第III層が地形的に低位部分にあたるため若干黒色土化した地層上において確認された。他遺構との重複関係はもたないが、北東・南西・南東各コーナーを後世の攪乱によって破壊されている。

平面プラン・規模はいずれも推定で南北202cm、東西188cmの方形を呈する。長軸方位はN-26°-Eを示す。

覆土は概ね第1層にふい褐色土で占められ、中央部に第2層ロームブロックの塊りが認められる。第1層は焼土粒・カーボンが一様に含まれている。



1. 7.5YR5/4 にふい褐色土、φ2mmの白色砂子、焼土粒子、カーボン粒を含む粘土質で固い。
2. 10YR6/6 明灰褐色土、ロームブロック主体で、脱孔層とも思われる。

第18図 第4号住居址実測図

確認面からの壁高は4～10cmをはかり、壁体は地山第Ⅲ層をそのまま利用する。壁面は平滑でなく、凹凸がやや激しい。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅲ層上に10cm内外の厚さで貼床が設けられる。ローム質の土と褐色土を混ぜた土を用いているが、やや軟弱である。また、凹凸があり、北から南へ若干傾斜している。

ビットは明瞭なものはなく、西壁下中央の小ビットの帰属性も定かでない。その他、北西コーナーに接して不整楕円状の深さ5cm内外の掘り込み(第19図)内には焼土塊・ロームブロックが充填されているがカマドと決定する根拠に乏しい。

遺物の出土状態は、住居内各所の床面上・覆土内に散在する程度で、少ない。

#### 遺物 (第20図)

土師器・須恵器などがあるがいずれも細片で、図化できたのは土師器2点にすぎない。

土師器の器種には甕・坏等の他、長頸瓶と考えられるものもある。甕は概して小型品が目立ち、口縁部が「く」の字状に短かく外反し、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリされる肉厚のものがある。この他、肉薄でヘラケズリされる所謂「武蔵甕」の胴部片も



第20図 第4号住居址出土土器実測図

第5表 第4号住居址出土土器観察表

図号	器種	法量	成形及び器影の特徴	器 影	備 考
20-1	土師器	— < 1.7g (7.6)	平底	内外面磨耗著しく調整不明。	図録実測B 色調10YR6/4 (にふい黄褐色)
20-2	土師器	— < 1.0g (5.8)	平底	内) 黒色地味。クナミダリ。 底部磨耗剥離切り。	図録実測B 色調10YR5/6 (黄褐色)

ある。坯は20—2があり、内面は黒色処理ののち、タテ方向のミガキ、底部は回転糸切りが施される。長頸瓶と考えられるものは肩部から胴部中位までの破片で図上復元はできない。肩部がやや張るフォームをもち、内外面ロクロ調整痕が顕著である。その後のミガキは肉眼視できないが、部分的にタテ・ヨコ方向の擦痕は観察できる。

須恵器の器種には甕・坏・高台付坏がある。甕はタタキ目の残る胴部、坏はロクロヨコナデの施される口縁部があるが、いずれも細片である。高台付坏は偏平なフォームを呈すると考えられる台部があるが、混入遺物とした方がよい。

以上、土師器甕は小型品が多く、他にあまり類例を見ない。長頸瓶と考えられる破片についても同様である。従って、本址の所産は坏20—2をもって平安時代前葉と考えておく。(小山)

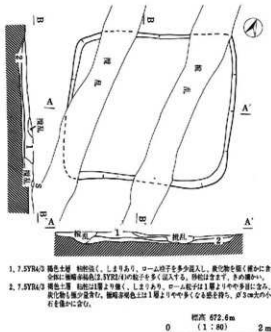
## 5) 第5号住居址

### 遺構・遺物 (第21図、図版五)

本住居址は、調査区B地区内南西部、け・こー2・3グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層黄褐色土層上面で確認された。他遺構との重複関係は認められないものの、近代の建築基礎と考えられる南北一直線に走る2本の攪乱溝により、北壁東から南壁中央、北壁中央から西南壁コーナーにかける壁と床面が55~81cmの幅で破壊されている。平面形態は南北296cm、東西345cmを測り、北壁長309cm、南壁長294cm、東壁長294cm、西壁長265cmの隅丸方形を呈する。南北を軸とした本址の振り幅はN—19°—Wを示す。壁残高は6~14cmを測り、床面積は9.5㎡を測る。

覆土は第1層褐色土層のみで、粘性は強く、しまりがあり、ローム粒子を多少混入し、炭化物を極く僅かに含んでいる。全体に極暗赤褐色粒子を多く混入し、砂粒は含まず、きめが細かい。

壁体・床面は共に第2層褐色土層を壁体に2~4cm、床面に4~10cmの厚さで貼って構築している。この第2層は、第1層と色調・含有物の点で類似しているが、粘性がより強く、ローム粒子・極暗赤褐色粒子が多めで、φ3cm大の小片を僅かに含む点で異なる。壁体は、第2層を貼ることによ



1. 7.SYR4/3 褐色土層 粘性強く、しまりあり、ローム粒子を多少混入し、炭化物を極く僅かに含む。全体に極暗赤褐色粒子はSYR2/4の粒子を多く混入する。砂粒は含まず、きめが細かい。
2. 7.SYR4/3 褐色土層 粘性は1層より強く、しまりあり、ローム粒子は1層よりやや多目に含む。炭化物は1層より少なく、極暗赤褐色土は1層よりやや多くなる感を得、φ3cm大の小片を僅かに含む。

第21図 第5号住居址実測図

り、かなり緩やかな立ち上がりを示し、床面とも幾分叩かれてはいるが、全体に軟弱である。

本址からは、柱穴・カマド・土坑・壁溝等の付属施設は一切検出されておらず、出土遺物も土師器甕および坏と考えられる図示不可能な小片が床面から2片、第2層中から3片出土しているのみで皆無に等しく、本址を人の居住空間と考えるにはかなり疑問が残る。(篠原)

## 6) 第6号住居址

### 遺構 (第22図、図版五・六)

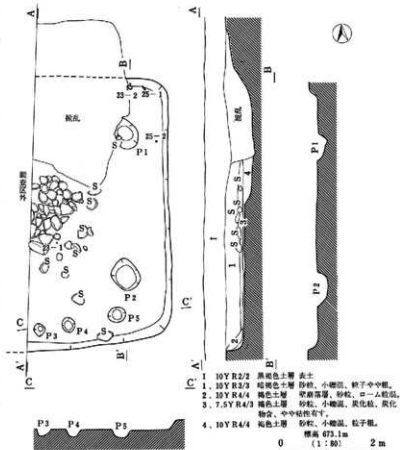
本住居址はB地区く・け・こー1・2グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層黄褐色土層上において検出された。他遺構との重複関係はないものの、北壁側の大部分が擾乱により破壊されており、西側は調査区外のため、住居址の全プランは把握できなかった。

平面プランは計測可能な東壁長484cmを測り、他の壁長、主軸方位は測定不能であった。

覆土は三層に分割でき

第1層黒褐色土層は砂粒と小礫の混ざる層であり、第2層は壁崩落層、第3層褐色土層は砂粒と小礫が混ざり、炭化粒・炭化物を含む、やや粘性を有する層である。この第3層の中に住居址中央の集石がみられ、床面より0~10cmの間に存在し、主に千曲川の川原石であるが、中に4個相浜層の集塊岩が含まれており、火熱をうけた痕跡と面取りがなされていることからカマドに使用した石と考えられるが、住居址の全プランが確認されていないので速断は避けたい。

床面は第4層褐色土層

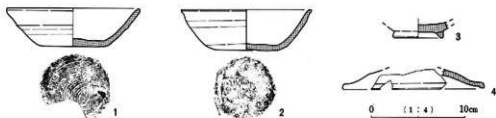


第22図 第6号住居址実測図

上で、中央部はかたく踏みしめられているが、周囲は比較的軟弱であった。壁体は部分的にやや粘性のある褐色土が残存しており、壁体の補強土とも考えられるが、全体としては軟弱であり、緩やかに立ち上がり、壁残高は18～35cmを測る。

ピットは全部で5個検出され、 $P_1 \cdot P_2$ は主柱穴と考えられる。 $P_1$ は北東コーナーより80cm内側、 $P_2$ は南東コーナーより80cm内側に位置し、 $P_1$ と $P_2$ の距離は233cmを測る。それぞれの形状は $P_1$ は50×65cmの楕円形で深さ18cmを計測し、 $P_2$ は55×65cmの隅丸長方形を呈し、深さ18cmを測るが、いずれも床面上では明確に確認できず床面を削いだ後明確になった。南壁にそって $P_3 \cdot P_4 \cdot P_5$ が $P_1 \cdot P_2$ と同様な状態で検出された。それぞれの形状は $P_3$ は25×28cmの楕円形、深さ14cm、 $P_4$ は27×34cm楕円形で深さ15cm、 $P_5$ は33×39cmの楕円形で深さ17cmを測り、それぞれの形態は類似している。用途としては入口の施設もしくは主柱穴の補助的な柱穴と考えられよう。

遺物の分布は、本住居址の全プランク把握できないため、速断はできないが、量的には少なく調査範囲内に散在し、特に集中する傾向は見い出せなかった。坏23-2と鉄線25-1が北東コーナー壁際より出土、鉄器25-2が $P_1$ と東壁の中間床面上より、坏23-1は床面中央の集石南端床面上より出土した。



第23図 第6号住居址出土土器実測図



第24図 第6号住居址出土土器拓影図



第25図 第6号住居址出土鉄器実測図

#### 遺物 (第23～25図、図版八)

本住居址からは須恵器・土師器・鉄器が出土している。その内図示し得たのは8点(実測図6点、拓影図2点)であり、須恵器の器種は、甕もしくは壺・長頸瓶・壺・坏等があげられ、土師器は甕・坏がある。

23-1・2共に須恵器坏で、1は底部回転糸切り、内外面火漉が観察でき、口辺上部から口唇



第6表 第6号住居址出土土器観察表

検出 番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 査 場	備 考
23-1	須恵器	(14.0) 4.0 7.0	口辺部僅かに内湾気味に立ち上がる。	内外面共にクロココナ子。 底部回転糸切り。	回転実測目 №3 内外蓋火摩 色調5GY6/1 (オリーブ灰色)
23-2	須恵器	(13.8) 4.3 6.6	口辺部内湾気味に立ち上がる。	内外面共にクロココナ子。 底部回転糸切りの後底部外面へラケズリ。	回転実測目 №1-3・6 色調10Y6/2 (オリーブ灰色)
23-3	須恵器 高台付坏	— 1.7? 5.2	高台付坏	底面貼り付け高台。	完全実測 内面火摩 色調10BG5/1 (青灰色)
23-4	須恵器	日 14.8 寸 2.1 —		内外面共にクロココナ子。	照片実測A 色調5BG6/1 (青灰色)

部にかけて器内が厚くなる。2は底部回転糸切りの後、底部再調整のへラケズリが施されている。

23-3は高台付坏で内面火摩が観察できる。23-4はかえりの有さない蓋である。鉄器においては25-1鉄鎌が出土し、刃部11cm、幅3.1cm、厚さ0.4cmを測、刃部内湾した曲刃鎌である。25-2は刃子の基部と思われ、残存値は4.9cm、幅1.25cmである。拓影図24-1は外面叩き目文様、内面ナデ調整の施されている須恵器、24-2は叩き目成形による内面同心円文、外面平行叩き目文が僅かに残る須恵器である。その他、図示し得なかった土師器に、薄手の胴部へラケズリの施された甕（武藏型甕）で口縁部「コ」の字状を呈するものが含まれ、また、1点ではあるが内面黒色処理の施された坏の小片が出土している。

以上、土師器甕に「コ」の字状の甕が出土し、須恵器坏底部切り離しが23-2以外は回転糸切り未調整であることから、本住居址の所産期は奈良時代末から平安時代初頭と考えたい。

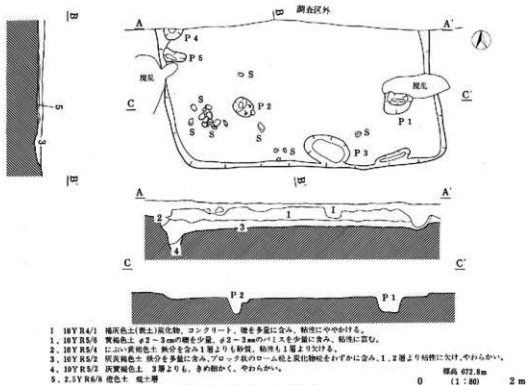
(羽毛田伸博)

## 7) 第7号住居址

### 遺構・遺物 (第26図、図版六)

本址は調査区南側の、き・くー3～5グリッド内に位置し、全体層序第III層上で確認された。他遺構との重複はないが、東・西両壁の一部が後世に攪乱され、また、北側は半分以上が調査区外にある。このため、遺構の全容は把握できないが、東西長543cmを測る方形か長方形を呈する比較的大型の住居であると推定される。主軸方位は概ね南北方向を指すと考えられる。

覆土は五層に分かれるが、大方は第1・3層よりなる。下層にあたる3層は床面上に一様に12～18cmの厚さで堆積し、鉄分が多く、ローム・炭化物粒子も含まれる。住居調査部分の中央西寄りの床面上には第5層焼土の薄い堆積もみられる。



第26図 第7号住居址実測図

確認面からの壁高は6.5~13cmを測るが、西壁中央部から北にかけては床面レベルが低くなるため、24cmと高い。壁体は地山第三層をそのまま利用し、平滑で堅固である。壁溝は明確なものはいずれも検出されなかった。

床面は中央部を中心として非常に堅固で緻密な貼床が施される。鉄分を多量に含む茶褐色土を利用しており、周辺部に至るとやや軟弱で踏み固った状況を示さない。

ピットは5個検出された。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が主柱穴と考えられるが、住居址プランに対応した整然とした配置とは言い難い。P<sub>1</sub>は径58cm内外の円形か楕円形、P<sub>2</sub>は44×36cmの楕円形を呈し、深さはいずれも33cmを測る。P<sub>3</sub>は南壁下中央にあり、97×61cmの楕円形を呈し、25cmの深さを有する。西壁中央に並ぶP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>はいずれも小規模なもので、それぞれ40・9cmの深さを有する。

カマドは検出されなかったが、未調査区の北壁中央にあると思われる。

遺物の出土状態は住居内各所の床面上・覆土内に散在するが量は少ない。

遺物はいずれも細片のため、図化できたものはない。土師器・須恵器があり、土師器は瘦片ばかりで、口縁部がやや不明瞭な変換点をもつ「く」の字状に屈曲する形態をもつものが目立つ。胴部上位は横・斜方向のヘラケズリ、中~下位は基本的に縦方向のヘラケズリが施される内薄の破片が多い。いずれも所謂「武蔵型甕」といわれる形質をもつと考えられる。

須恵器の器種には甕・坏があり、甕は口唇部に断面三角形の凸帯をもつもの、胴部に叩き目の施されるものがある。坏は口縁部にロクロヨコナデが施される細片がある。

以上、本址も所産期を特定できる遺物に乏しいが、土師器甕の特徴から平安時代前葉としておきたい。

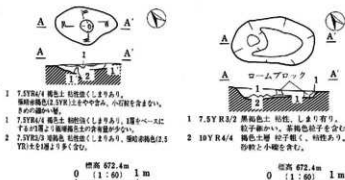
(小山)

### 第3節 土 坑 (第27~29図、図版六)

本遺跡からは土坑がA地区2基、B地区2基の計4基検出されている。いずれも全体層序第Ⅲ層より検出された。

第1号土坑は、A地区あ・い-6・7グリッド内に位置し、規模・形態は長軸154cm、短軸95cmの楕円形を呈し、深さ70cmで断面V字形をなしている。長軸方位はN-23°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

第2号土坑は、A地区い・う-6グリッド内に位置し、P6と重複関係にあり、P6に破壊されている。規模・形態は長軸315cm、短軸130cmの舟形を呈し、深さ22cmを測る。長軸方位はN-11°-Eを示す。遺物は土師器・須恵器が出土しており、図化できたのは須恵器坏1点であった。土師器には武蔵形甕の口縁部から胴部片が、須恵器には坏と四耳壺が出土している。28-1の坏は内外面ロクロ調整の口辺部で、土師器武蔵型甕は口縁部の小辺であるが、「コ」の字状口縁を呈しておらず、資料が少ないため速断はできないが、平安時代前葉に時期を求めることができる



第27図 第3・4号土坑実測図

のではないと思われる。

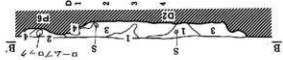
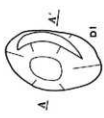
第3号土坑はB地区け-5グリッド内に位置し、規模・形態は長軸100cm、短軸60cmの不整楕円を呈し深さ24cmを測る。長軸方位はN-49°-Wを示す。遺物は出土しなかった。



第28図 第2号土坑出土土器実測図

第7表 第2号土坑出土土器観察表

検出番号	器種	注意	成形及び器形の特徴	調査	備考
28-1	須恵器	(13.6) < 3.4 —	口辺部調整突縁に外転する。	内外面共にロクロヨコナデ。	同坑実測図 色調GY6/1 (オリーブ灰色)



**D2-P6の土層説明**  
 1 10YR6/3 に近い黄褐色土層  
 多量に土層あり、粘土を含む。  
 2 10YR6/2 黄褐色土層  
 粘土層あり、粘土層が厚く  
 土層あり、ローム粘土を含む。  
 3 10YR6/2 黄褐色土層  
 粘土層あり、黄化微ローム  
 粘土を含む。  
 4 10YR6/4 褐色土層  
 粘土層あり、土層あり、

**P1土層説明**  
 1 10YR6/2 黄褐色土層  
 粘土層あり、土層あり、粘土を含む。



**D1土層説明**  
 1 10YR6/3 黄褐色土層 粘土層あり、粘土層が厚く土層あり、茶褐色粘土を含む。  
 2 10YR6/2 黄褐色土層 粘土層あり、粘土層が厚く土層あり。  
 3 10YR6/2 黄褐色土層 粘土層あり、土層あり、小塊を含む。

**P1土層説明**  
 1 10YR6/3 黄褐色土層  
 粘土層あり、土層あり、粘土を含む。

**P2-P5土層説明**  
 P3 1 10YR6/2 黄褐色土層 粘土層あり、土層あり、小塊を含む。  
 P4 P3と同じ。  
 P5 P3と同じ。

第29図 第1・2号土坑、P1-P7実測図

0 1m 縮尺0.75:1(1:40) 2m

第4号土坑はB地区くー4・5グリッド内に位置し、規模・形態は長軸129cm、短軸71cmを測る楕円形を呈し、深さ19cmを測る。長軸方位はN—66°—Wを示す。遺物は出土しなかった。

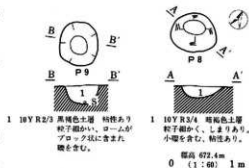
(高村)

## 第4節 ピット群及び区出土遺物

### 1) ピット群 (第29・30図、図版六)

本遺跡から検出されたピットは合計9基存在する。いずれのピットも全体層序第Ⅲ層上において検出された。いー6グリッド内よりP1・P2・P6が、あー5グリッド内よりP3・P4・P5が、いー5グリッド内よりP7が、あ・いー2グリッド内よりP8・P9が検出されている。

規模・形態はP1が直径40cmの円形で深さ9cm、P2は長軸72cm、短軸54cmの楕円形で深さ10cm、P3は長軸54cm、短軸45cmの円形に近い楕円形で深さ



第30図 P8・P9実測図

径60cmの円形で深さ18cm、P4は直径50cmの円形で深さ18cm、P5は直径60cmの円形で深さ18cm、P6は直径54cmの円形で深さ12cm、P7は長軸50cm、短軸34cmの楕円形で深さ5cm、P8は長軸78cm、短軸63cmの楕円形で深さ16cm、P9は長軸68cm、短軸59cmの楕円形で深さ28cmを測る。P1～P6まではほぼ一直線上に並びP6・P2・P3・P5は間隔がほぼ等間隔になるが、周囲からこれらに関連するピット群は検出されず、孤立柱建物址の一部とはならないものと思われる。第2号土坑とP6は重複関係にあり、P6が第2号土坑を破壊して構築されていることから、平安時代前葉より新しい時代になると思われる。遺物はP3より武藏型甕の口縁部刃片と胴部片が4片出土しているが流れ込みの可能性が強い。(高村)

### 2) 区出土遺物 (第31・32図、図版八)

A・B地区より土師器・須恵器・灰釉・土師質土器?が出土している。そのうち図化できたのは土師器1点、須恵器2点、灰釉陶器1点、土師質土器?1点であり、拓影図として土師器坯底部1点、須恵器甕胴部3点がある。

31-1はA地区表土より出土した土師器甕で底部回転糸切りの後、角張った高台を貼り付けてある。内面の調整は丁寧な縦ヘラミガキがなされており、光沢がある。一部に黒色処理されたと思われる部分があり、脱色してしまった可能性がある。平安時代のものと考えられる。

31-2はB地区表土より出土した須恵器坏で底部回転糸切り未調整である。内外面ともロクロヨコナデ調整がなされており、平安時代のものと考えられる。

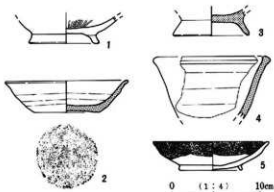
31-3はB地区表土より出土したもので須恵器高台付碗になる可能性が高いと思われ、このような形態の須恵器は初見である。底部回転糸切りの後やや高めめの三角高台を貼り付けたもので、内面は器面が荒れていて観察しにくいが黒色処理されていたかもしれない。平安時代のものと考えられる。

31-4はB地区表土より出土したもので、土師系の硬質な焼き物でこの器種は不明である。ロクロにより調整されており、あるいは上部の可能性もあろう。

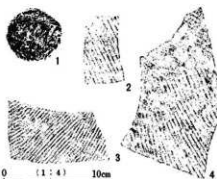
31-5はB地区表土から出土した灰釉陶器皿である。この灰釉陶器は、斎藤孝正氏によれば東濃系丸石2号窯式の灰釉であるという鑑定が得られた。以

上、A・B地区の出土土器は平安時代のものが多いといえよう。

(高村)



第31図 A・B地区出土土器実測図



第32図 A・B地区出土土器拓影図

第8表 A・B地区出土土器観察表

発見番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
31-1	土師碗	— (2.7) 7.3	高台付碗	内) 細かい丁寧なナデヘアミガキ、黒色処理の可能性 がある。 外) ロクロヨコナデ。底部回転糸切りの後貼り付高台。	完全黄褐色 A区表土 色附2.5YR5/6 (薄褐色)
31-2	須恵坏	(13.0) 3.4 6.6	口辺部内寄外縁、口唇部外反する。	内外面共にロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。	須恵実測B B区表土、内面火傷 色附5DGS/1 (青灰色)
31-3	須恵地 ?	— (1.8) 7.9	高台付坏、やや長脚の高台。	底部回転糸切りの後貼り付高台。 内面黒色処理されていたかもしれない。	須恵実測B B区表土 色附2.5GY6/1 (オリーブ灰色)
31-4	?	(11.4) (6.5) —	内縁を明確に有し、口辺部隅やかに「S」 字状に外反する。	内外面共にロクロヨコナデ。	破片実測A B区表土、焼成不良 色附10YR5/1 (にじみ黄褐色)
31-5	灰釉鉢	12.2 3.1 6.5	高台付皿、つげ輪。口辺部内寄外縁、口唇 部外反する。	内) ロクロヨコナデ。底部付近ナデ調整。 外) ロクロヨコナデ。底面ナデ。	完全黄褐色 B区表土 色附2.5GY7/1 (薄オリーブ灰色)

## 第V章 調査のまとめ

今回、薮沢遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、竪穴住居址7棟、土坑4基、ピット群1群などがある。一方、出土遺物は、土師器、須恵器、灰軸陶器、鉄器などがある。以下、今回の調査において検出された遺構・遺物を中心として、特に遺物については、佐久地方における平安時代の土器分析を行ない、薮沢遺跡の年代的な位置づけを含めてまとめを行っていきたい。

### 第1節 遺構

本調査は限られた調査区内の調査のため、全プランを把握できたのは第1・2・5号住居址の3棟のみであり、また、以前の校舎建築等により削平・攪乱等を受けており、良好な状態で検出された住居址は第1号住居址のみであった。

住居址の所産期を遺物の面から考察すると、第1号住居址は平安時代第1段階新相に比定され、

第9表 薮沢遺跡住居址一覧表

( )は推定値

遺 構	検出位置	平面プラン及び規模	壁残高 (cm)	付 属 施設	時 期	備 考
1号住	あ・い・ 7・5	東壁長320cm、西壁長332cm、 南壁長352cm、北壁長346cm、 東西長357cm、南北長356cmの隅丸方 形。 床面積13.9㎡ 主軸方位N-95.5°-E	23-38	東壁中央よりやや南寄り にカマド 主柱穴2	平安時代 第1段階新相	西部壁端が攪乱層により破壊さ れる。
2号住	あ・い・ 10	東壁長270cm、西壁長376cm、 南壁長300cm、北壁長346cm、 東西長381cm、南北長300cmの隅丸方 形。 床面積14.9㎡ 主軸方位N-2°-W	15-20		奈良時代?	竪穴状遺構か。
3号住	う・9・ 10	北壁長(389)cm	0-10		平安時代前葉	南部半分が調査区外 中央部は攪乱により破壊される。 竪穴状遺構か。
4号住	あ・い・ 1・2	東壁長(185)cm、西壁長(188)cm、 南壁長(168)cm、北壁長(177)cm、 東前長(188)cm、南北長(202)cmの方形。 主軸方位N-20°-W	4-10		*	北東部が調査区外 南西部コーナー及び東部大半が 攪乱により破壊される。
5号住	け・こ・ 2・3	東壁長294cm、西壁長285cm、 南壁長294cm、北壁長308cm、 東西長345cm、南北長296cmの隅丸方 形。 床面積9.5㎡ 主軸方位N-19°-W	6-14		?	竪穴状遺構か。
6号住	く・け・ こ・1・ 2	東壁長484cm	18.5-24.5	主柱穴2、柱穴3、依1	奈良時代末- 平安時代初期	北部半分が調査区外
7号住	き・く・ 3・4・ 5	南壁長529cm	6.5-13	主柱穴2、柱穴3	平安時代前葉	西部半分が調査区外

第2号住居址は奈良時代?、第3・4・7号住居址は平安時代前葉、第6号住居址は、奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられ、奈良時代後半から平安時代前葉の集落址が存在したことが判明した。また、狭い範囲での調査のため集落址の全容を把握できなかったが、千曲川と片貝川の間に挟まれた自然堤防の他の遺跡との関連を調査された遺跡で調べると、徳田遺跡より平安時代の住居址、中道遺跡より奈良～平安時代の住居址、三塚三塚遺跡より古墳時代後期、平安時代の住居址、三塚町田遺跡より古墳時代後期の住居址、市道遺跡より古墳時代中期～後期、平安時代の住居址、跡部町田遺跡より古墳時代後期の住居址、三塚鶴田遺跡より平安時代の住居址、上桜井北遺跡より古墳時代後期、平安時代の住居址が検出された。これらのことは、自然堤防上に古墳時代中期から定住が始まったことを物語るものであり、生産地、治水等の推移に関係しているものと思われ、千曲川の氾濫原の開発を知る手掛りになるとと思われる。

次に本遺跡で検出された住居址の特徴であるが、第1号住居址は佐久における平安時代の平均的(1辺の壁長4m前後)な規模の隅丸方形の住居址であり、カマドの構築位置が東壁中央に位置しているが、他にこの自然堤防上の遺跡からは、古墳時代後期に跡部町田第2号住、平安時代に上桜井北第6・16・18住の4棟検出されている。「若宮遺跡」(小山1984)の「佐久平のカマド」で古墳時代～奈良時代においては主旨カマドは北壁中央に設けられているが、平安時代になると東壁に構築される例が増加すると述べており、第1号住居址東壁中央のカマド位置は、その例といえよう。

第2～5号住居址においては、規模が1辺の壁長2m前後から4mとばらつきはあるものの、いずれもカマド、ピットの底跡を留めず、遺物の出土が少なく、住居址に付随するなんらかの機能を有した竪穴状遺構とも考えられ、本自然堤防上の遺跡に類例をみるならば、徳田遺跡第2号住居址、三塚鶴田遺跡第4号住居址、上桜井北遺跡第13・15号住居址等があげられ、集落址の中においてどのような役割を果たしたか興味もたれる。

第6・7号住居址は全プランが把握できないが、1辺5m前後を有し、主柱穴も検出されており、類似性が認められる。

(羽毛田伸博)

## 第2節 遺物

蕨沢遺跡から出土した土器群は平安時代前葉を中心とした時代に比定される。特に第1号住居址出土の一括土器は、平安時代の編年の指標になり得る良好な資料である。現在、佐久地方の編年が漠然とした中で各報告書毎に述べられているため、該期の歴史研究に著しい進展は見られない。ここでは、佐久地方の平安時代住居址検出遺跡を中心にして概略的な編年を組み立てて蕨沢遺跡の時期決定をするとともに、今後の敲き台としたい。



## 佐久地方の平安時代土器編年試論

佐久地方の発掘調査は、昭和48年上の城遺跡調査から大規模化の傾向が見られ、昭和51・52年後沢遺跡で初めて全面調査を実施した。昭和50年代は佐久市を中心に毎年20ヶ所近い遺跡の発掘調査を実施しており、昭和60年代にはいと関連自動車道路を初めとした大規模開発にともない当センターの設立、長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所の開設と佐久市・御代田町等を中心に一段と大規模な調査が数多く実施される状況となり、現在までに佐久地方で実施された発掘調査件数は227ヶ所におよぶものと考えられる。

このような状況の中で佐久地方の平安時代の集落址の存在が多く明らかとなっており56ヶ所<sup>①</sup>に達している。しかし、土器編年作業はその資料の増加にもかかわらず、周防畑遺跡A中の花園(1980)によるもの、前田遺跡において奈良時代から平安時代初頭にかけて行った堤(1987)以外は各報告書の中で漠然と位置づけている状態である。県内では笹沢(1976)による十二ノ呑遺跡での詳細な分析、岡田(1977)の土師器の編年研究、青木和明、中殿章子(1987)が『三輪遺跡(2)』で行った長野市における平安時代土器様相などがある。さらに編年の研究ではないが、原(1987)が行った「松本平における平安時代の食膳具—変化とその背景の予察—」平安時代に圧倒的に多い食膳具に焦点をあて分析しており、原は単に量が多いということの理由で考察を進めたのではなく、食膳具の構成の変化(食生活様式の変化)が当時の社会の変化と対応して推移していると考えている。この考えは土器編年を組み立てる際にも重要と思われ、原の論考をもとに佐久地方についての変化を追って編年を組み立ててみたい。

佐久地方の奈良時代と平安時代を明確にする指標は存在しない。堤が前田遺跡で行った奈良・平安時代の土器様相とその編年の予察の前田第VII期の資料をもって奈良時代から平安時代の初めと想定しておきたい。

### 1. 器種分類

食膳具の器種分類(「松本平における平安時代の食膳具」中の原の行った分類に準拠する)

○ 坏 鉢と皿の中間の分量をもつものを指す。

坏A 高台をもたず、平底のもので基本的にロクロ調整されているものを指す。土師器・内面黒色土器・須恵器のいずれにも見られる。

坏A I 口径15~18cm、器高4~6cm。主に内面黒色土器に見られる。

坏A I' 口径18~19cm前後、器高4~5cm。坏A Iの範ちゅうに入ると思われるが、器高が低く、口縁が大きく広がる特異な形態もっているため細分した。

坏A II 口径12~15cm前後、器高3~5cm前後。土師器、内面黒色土器、須恵器の

いずれにも見られる。特に須恵器は口径13~15cm、器高3~5cm内にほとんど占められ、坏AⅡ以外の法量をもつものは見当たらなかった。

坏AⅡ' 口径13~15cm、器高5~7cm。坏AⅡの範ちゅうにはいると思われるが、器高が深く内湾した特異な形態をしているので細分した。

坏AⅢ 口径9~12cm、器高3~5cm。すべて土師器である。

坏B 高台がつくもので、体部下部に明瞭な稜を有し、ほぼ外傾して立ち上がるものを指す。須恵器、内面黒色土器にみられる。

坏BⅠ 口径15~17cm、器高6~7cm。

坏BⅡ 存在を確認できなかった。

坏BⅢ 口径14~16cm、器高3~4cm。

坏BⅣ 口径12cm以下、器高4cm前後。

坏C いわゆる甲斐型とよばれる土師器で、佐久地方では、小海町雨堤遺跡から出土している。

○壙 高台がついたもので、同じ高台がつく坏Bとは形態が明らかに異なる。土師器、灰釉陶器にみられる。

壙A 口径14~19cm、器高4~6cm前後。主に内面黒色土器、灰釉陶器にみられる。

壙B 存在を確認できなかった。

壙C 口径11cm前後、器高5cm前後。内面黒色土器にみられる。

壙D 口径8cm以下、器高4cm以下。黒色土器にみられる。

壙E 高台が足高となる壙。土師器にみられる。

○皿 坏や壙より浅いものをさす。

皿A 高台のつかないもの。土師質土器にみられ小型である。

皿B 高台がつくもの。須恵器、内面黒色土器、灰釉陶器にみられる。

皿C いわゆる段皿であり、内面に明瞭な段を1つもつ。灰釉陶器にみられる。

皿D 柱状の高台をつけたもので、大、小2種類存在する。大を皿DⅠ、小を皿DⅡとする。

○盤は確認できなかった。

○鉢 坏より大形のをさす。

鉢A いわゆる鉄鉢形である。舞台場遺跡11住にみられる。

鉢B 坏Aをそのまま大きくした形のもので、高台のつくものとつかないものが存在する。松本平では坏AⅠとしてあるが、佐久地方では口径18cm以上、器高6cm以上のものは鉢Bとしたため、相違点がある。

鉢C 甕の口径を大きくしたような形態をしている。

#### 土師器甕の分類

○甕A いわゆる武蔵型甕である。口径により3分類できる。

甕A I 口径18～25cmの大形の武蔵型甕である。

甕A II 口径13～17cmの中形の武蔵型甕で、台付甕も存在しそうである。

甕A III 口径10～12cmの小形の武蔵型甕で、すべて台付甕の可能性が高い。

○甕B ロクロ調整が行われる甕をさす。口径により3分類できる。

甕B I 口径18～25cmの大形の甕。

甕B II 口径13～17cmの中形の甕。

甕B III 口径10～12cmの小形の甕。

○甕C 甕A・B以外の甕をさす。

## 2. 食膳具の器種構成と焼物の種類による時期区分

### 第1段階古相（前田VII期）

食膳具の器種構成は、坏A I、坏A II、坏B I、坏B III、鉢Cである。量的には須恵器坏A IIがほとんどを占め、わずかに内面黒色土器坏A Iと坏A IIが存在する。坏B I、坏B IIIはすべて須恵器で坏部は箱型に急角度で立ち上がる。

食膳具以外の器種構成は、蓋、甕A I、甕A II、甕A III、須恵器では長頸瓶をはじめ種々の器種がある。甕A Iは、口縁部明瞭な「コ」の字状を呈するものがあるが、まだ不明瞭なものが多い。

### 第1段階新相（野火付9住～15住、若宮6住、五ヶ城9住、薮沢1住）

食膳具の器種構成は坏A I、坏A I'、坏A II、坏B I、坏B III、坏B IV、埴A、皿B、鉢Cである。量的にはまだ須恵器坏A IIが主体を占めていることから第1段階に含めた。内面黒色土器坏A IIの量も増し、新たに埴A、皿Bが出現することから新相とした。坏B Iは埴Aの出現のためか、坏部の形態に変化がみられ、箱型の急角度に立ち上がる坏部が、ゆるやかな角度で立ち上がるようになる。また、内面黒色土器坏B IIIは須恵器の模倣と考えられる。皿Bの初現は須恵器で、内面黒色土器に変わっていく。

食膳具以外の器種構成は、蓋、甕A I、甕A II、甕A III、甕B I、甕B II、須恵器長頸瓶などがある。武蔵型甕A Iは、口縁部明瞭に「コ」の字状のものが増えるが、まだ、不明瞭なものも存在する。甕B Iが、この段階でみられるのは、宿上屋敷2住の1例だけで、あとはいわゆる武蔵型甕である甕Aがほとんどである。しかし、甕については遺跡差（地域差）を考慮してゆく必要があろう。

この時期に、須恵器蓋・坏B及び鉢Cは基本的になくなるものと思われる。

#### 第2段階新相（蛇塚B第二次6住～12住・14住～20住）

食器の器種構成は、坏A I、坏A II、坏A II'、坏B I、埴A、皿B、耳皿、鉢Bである。量的に坏A IIの主体が須恵器から内面黒色土器に変化したことから第2段階とした。内面黒色土器坏B Iは須恵器の模倣と考えられる。埴A・皿Bに灰釉陶器が加わり、内面黒色土器も含めて、その量を増すと考えられるが、内面黒色土器皿Bはこの時期になくなる。鉢Bが新たな器種として加わる。

食器以外の器種構成は、甕A I、甕B I、甕B II、甕B IIIなどで須恵器坏A IIの減少と同じく、その他の須恵器も器種・量とも減少しているようである。甕A Iは明瞭な「コ」の字状口縁のものだけになる。現在の段階では、ログロ調整のB Iが急激に量を増すことが観察できる。

第2段階新相から第3・4段階は資料が少ないため、確実なことは言えない。今後、資料の増加に伴い変化すると思われるが、現段階の記述を進めていきたい。

#### 第2段階新相（曾根城3住、五ヶ城3住）

食器の器種構成は坏A I、坏A II、坏A II'、埴Aであるが、灰釉陶器皿Bも加わるものと思われる。量的には土師器坏A IIの量が増し、しかも、小形化し、坏A IIIに近くなる。須恵器坏A IIもわずかに残るが、この段階でなくなるものと思われる。甕は、甕B Iが存在する。

#### 第3段階（五ヶ城11・15住、第1・2号竪穴状遺構、宿上屋敷5住、久保田1・5住、北西ノ久保第2次第1号特殊遺構）

食器の器種構成は、坏A II、坏A III、埴A、埴C、埴E、皿C、皿D II、耳皿である。第3段階としたのは、量的に今まで坏A IIが主体を占めていたが、坏A IIIが主体を占めるようになったからである。埴Eは足高の高台をもつものであるが、第2段階である三塚嶋田1住で高台部だけ出土しており、あるいは前段階で出現しているかもしれない。皿D IIは五ヶ城15住の出土で11住との関係から類推したので、あるいは第4段階になるかもしれない。甕では甕C Iが存在し、羽釜が出現する。

#### 第4段階（蛇塚B第1次1住・4住、蛇塚B第2次13住、芝間第1号竪穴状遺構、北西ノ久保第1次21住・22住）

資料が少ないため、確かなことは言えないが、第1・2・3段階で主体となっていた坏Aが皿Aに変わり、平安時代の土器として位置づけて編年した訳であるが、第4段階の土器様相は坏Aが主体を占めていた各段階との格差が大きく、新たな時期区分が必要と考えられる。皿Aの器種の他坏A II、皿D I、皿D II、羽釜などがある。

### 3. 各段階の実年代比定について

実年代比定には、須恵器と灰釉陶器を手掛りに行っていきたい。灰釉陶器については、現在50年前後のズレがあって危険ではあるが、一応の目安として前川要氏の年代観を採用し、原が行った「松本平の古代末期の土器様相」の年代観も参考にして考えてみたい。

第1段階新相では、野火付10住で折戸10号窯式後半の長頸瓶、14住で井ヶ谷78号窯式の小型長頸瓶、若宮6住で井ヶ谷78号窯式の環状耳付長頸瓶が出土していることから9世紀前半と考えておきたい。

第2段階古相では光ヶ丘1号窯式から大原2号窯式の灰釉陶器が伴出していることから9世紀後半～10世紀初頭に考えられる。

第3段階では大原2号窯式と虎溪山1号窯式の灰釉陶器が伴出していることから10世紀後半～11世紀前半と考えておきたい。

以上のことを第10表にまとめてある。

### 4. 今後の問題点と薊沢遺跡出土土器の位置づけ

佐久地方の平安時代の土器について、4段階6区分したわけであるが、第1～第3段階までは環Aが主体的構成器種として食膳具の中にその位置を占めている。第1段階では須恵器環AⅡが、第2段階では内面黒色土器、土師器環AⅡが主体を占め、第3段階に至って土師器環AⅢが主体となる。第4段階になると土師質土器ⅢAが主体になり、この第4段階を平安時代的土器として包括してよいものかどうか疑問が残る。このことは第1～3段階の土器の時代区分で使用している平安時代が適切かどうかにも関わってくるものと思われる。

第1段階から第2段階古相までの間の土師器環Aについて内面黒色土器がほとんどであるが、内面黒色土器でない土師器が存在するかどうか。

火熱を受けると黒色処理したものが脱色をしてしまうという特性から、今後注意して観察していくことが必要だと考える。

土師器甕では、いわゆる武蔵型甕である甕AⅠの口縁部「コ」の字状に

第10表 各段階の実年代一覧表

段	階	伴出須恵器・灰釉陶器	実年代
第1段階	古相		8世紀末～9世紀初頭
	新相	0-10, IG-78 (K-14)	9世紀前半
第2段階	古相	光ヶ丘1号窯式 大原2号窯式	9世紀後半～10世紀初頭
	新相	(大原2)	10世紀中葉
第3段階		大原2号窯式 虎溪山1号窯式	10世紀後半～11世紀前半
第4段階			11世紀後半以降

なるものは第1段階から存在し、第2段階古相ですべて明瞭な「コ」の字状口縁となり、この段階でなくなるものと考えられる。第2段階古相に變B I が急激に増加するが、變については前述したように遺跡差（地域差）があるように思われるので今後の問題としたい。

本遺跡第1号住居址は、すでに述べたように第1段階新相に位置づけられ、9世紀前半の土器群と考えられる。他の住居址については、出土遺物が少なく明確でないが、第2号住居址が若干古く、第4号住居址がやや新しくなるものと思われる。

以上、時間的制約の中、概略的な編年を諸氏の助言を受けながら行ってきたわけであるが、今後の敲き台としていきたい。(高村)

注1 佐久地方において平安時代の遺構が検出された遺跡名を、市町村別に列挙すると

佐久市（36ヶ所） 債田、戸坂第1次、中道、北一本柳、上の城、三塚三塚、今井西原、市道、三塚崎田、後沢、上塚井北、和田上南、蛇塚B第1次、岡防畑A、兵士山、岡防畑B、小金平、舞台場、北西の久保第1・2次、彌村第2次、西八日町、御所平、若宮、蛇塚B第2次、舞姫屋第1次、蛇塚B第3次、戸坂第2次、西養、芝岡、茂内口、宿上屋敷、曲尾田、西塚ふた（市）、西塚ふた（県）、東塚ふた、栗毛坂、前田

小諸市（6ヶ所） 関口B、宮ノ反、宮ノ北、五ヶ城、菅根城、久保田

御代田町（3ヶ所） 野火付、前田、十二

望月町（9ヶ所） 大綱、又久保、新水A・B、金塚、胡桃沢、春日尾崎、竹之城原、浦谷B、若清水

南佐久郡（2ヶ所） 横尾、西堤

注2 寺島 俊郎氏の御教示による。

注3 原 明芳・寺島 俊郎氏には種々の助言を賜わった。また、林 幸彦氏からは未発表の資料を快く提供して下さった。

## 引用参考文献

- 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食器具一変化とその背景の考察」『信濃III39-4』
- 1987 「松本平の古代末期の土器様相—吉田川西遺跡の出土資料を中心として—」
- 坂口一、三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器編年—住居の重複と共存関係による土器型式組列の検討—」『群馬史研究』  
24。
- 笠沢 浩 1976 「十二ノ舌遺跡の奈良・平安時代の土器編年」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4—』
- 群馬県教育委員会 1984 「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ」
- 川上 元 1978 「土師系什器の展開と終焉」『中部高地の考古学Ⅰ』
- 佐久市教育委員会 1971 「鎌田」、1972 「北近津・戸坂」、1975 「三塚」、1976 「市道」、1978 「三塚鎌田」、1978 「上桜井北」、1980 「姥塚B」、1981 「舞台塚」、1984 「若宮」、1985 「鑄師屋遺跡」
- 佐久市教育委員会・佐久遺蔵文化財調査センター 1986 「西裏・竹田塚」「芝間」1987 「宿上屋敷、下川原・光明寺」、1988 「淡瀬・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ」、1989 「北西ノ久保」
- 小諸市教育委員会 1981 「関口B遺跡」「五ヶ城」「宮ノ北」1983 「曾根城」1984 「久保田」1985 「宮ノ反」
- 御代田町教育委員会 1985 「野火付遺跡」1987 「前田遺跡」
- 望月町教育委員会 1981 「新水」1982 「全家遺跡」1984 「竹之城原遺跡、浄水坊遺跡、浦谷B遺跡」
- 小海町教育委員会 1986 「四場遺跡」
- 川上村教育委員会 1983 「横尾」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981 「清里・陣場遺跡」
- 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984 「中尾」
- 東部町教育委員会 1987 「外城遺跡、有津産遺跡、陣場遺跡」
- 長野市教育委員会 1987 「三輪遺跡(2)」
- 佐久考古学会 1985 「佐久考古通信No 1-30」

葛石遺跡



# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機

円正坊遺跡群萬石遺跡は佐久市岩村田に所在し、東側を久保田用水、西側を濁川にはさまれた浅間山を基点として放射状に細長く発達した佐久平特有の「田切り」地形の一台地上端部に位置している。同遺跡群では北西端に位置する清水田遺跡が昭和54年に発掘調査されており、弥生時代10棟、古墳時代3棟の竪穴住居址が検出され、また昭和59年度佐久市遺跡詳細分布調査でも弥生～平安時代の遺物が濃密に分布する地域であることが確認されている。

昭和62年度、県立岩村田高等学校によって電子機械科棟建設工事が同校敷地内北側(萬石遺跡)において計画されたため、岩村田高等学校、長野県文化課、佐久市教育委員会の三者によって保護協議が行われた。その結果、遺跡の破壊やむなきに至り、状況確認のため7月21日、佐久市教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、木片、弥生時代の土器片を包含する黒色有機質土層が確認されたことにより、本遺跡は弥生時代などの水田址をはじめとする生産遺跡の性格を内包するのではないかという期待が高まった。そこで佐久市教育委員会が長野県教育委員会高校教育課より委託をうけ、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが緊急に発掘調査を行い、記録保存をはかる運びとなった。



第 1 図 萬石遺跡の位置 (1 : 50,000 国土地理院地形図による)

## 第2節 調査日誌

昭和62年11月5日(休)

岩村田高等学校、佐久市教育委員会、佐久埋蔵文化財調査センターの三者で現地にて打ち合わせを行う。

11月9日(月)～11月10日(火)

重機を搬入し、埋土及び旧表土を除去して、地表下約1m程の黒褐色土層を検出する。

グリッド設定。東西を数列、南北を五十音列として4m方眼に組む。

壁面の精査を行い、基本土層の把握を行う。また、遺構確認面の把握作業も行う。

11月11日(水)～20日(金)

各グリッドの掘り下げ作業を行い、現地地表下2～2m50cmまでの層序を確認する。X層には弥生土器が純粋に包含されており、X・XI層に植物遺体が含まれていることが確認されたため、土壌サンプル(分析用)の抽出を行う。

11月21日(土)～25日(休)

調査区北西側の地形が高い部分から土坑と弥生時代の壺棺墓が検出されたため、掘り下げ、実測作業、写真撮影を行う。

全体図作成・写真撮影、器材撤収を行い調査を終了する。

昭和62年11月26日(休)～昭和63年3月31日(休)

遺物・図面整理、報告書作成作業を行い全調査を完了する。

## 第II章 遺跡の立地と環境

### 第1節 薦石遺跡附近の自然環境(地形・地質)

薦石遺跡は佐久市大字岩村田字薦石、即ち県立岩村田高等学校校地内に所在する。この付近が長菱形を呈する佐久平のほぼ中央部に標高は697m内外である。地質構造の面からはこの佐久平は滑津川の東西線を境に二区分に大別される。①は佐久市南半部中込野沢地区、臼田町・佐久町の千曲川流域平地で第三紀末から第四紀洪積期にかけての淡水湖湖底平原へ沖積期に千曲川が搬入した沖積層堆積平原である。②は岩村田台地と呼ばれる佐久市北部岩村田地区と御代田町小諸市

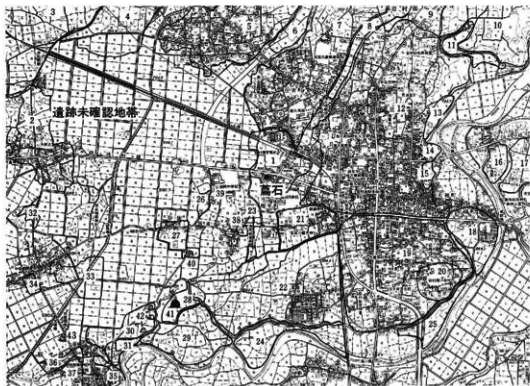
平坦部を含めた平地で浅間火山噴出物堆積地帯である。葛石遺跡は岩村田地区の略中心にある。わが国の最も若い火山の浅間山は洪積末期、上信火山帯最南端に火山活動を開始して黒斑火山として成長し、噴火口径東西4 km、標高2900m内外の大火山を形成した。その火口が現在湯の平として残っているがこの火山が蛇堀川源泉付近で水蒸気爆発を起し、外輪山西南部を潰壊し既存山体岩石大熱泥熱水を蛇堀川に沿って多量に流下し、佐久市中佐都付近の平坦地で排水し、泥流を散布堆積した。これが中佐都田圃に現在も残る多くの流れ山残丘で塚原泥流と呼ばれ平塚・塚原・赤岩などの地名ともなっている。この塚原泥流は従来では中佐都地区に分布するとされていたが、最近の調査で岩村田町区域一本柳・黒岩城信濃石付付近まで延びることが確認され、葛石遺跡調査でも泥流岩塊が発掘された。塚原泥流地帯の地表は凹凸が多かったと考えられるが、浅間山麓の湧水湯川・湧玉川等の流水堆積と、その後の第一追分軽石流（ $P_1$ ）、第二軽石流（ $P_2$ ）の多量の降下堆積と前掛山の追分火砕流などによって埋立てられ現在の岩村田台地表面は平坦化された。葛石遺跡の今回の調査の現状を記すと、大正14～15年頃の岩村田高校建設以来、水田耕作面は基盤整備増改築による地表改変の跡が到る所で見られ、現地表面より120cm下まで埋土されていた。地表下120cm面で旧表土層（40～50cm）が見られ、その下層は砂層をはさみ有機質の黒色土が40～50cm堆積し、弥生時代遺物が含まれていた。この黒色土は岩村田台地表面全体に分布する浅間軽石流（ $P_1$ ・ $P_2$ ）面凹部への沼沢地堆積物で、層厚の厚い長土呂一部地区は遺物の出土の少ない部分でもある。長土呂地名の起りは沼沢地で水をたたえていたことによるとも言われている。それより下部は未分解粘結性の弱い軽石流が厚く堆積するが、層厚5～15mと相違があるのは下底部の塚原泥流表面に高低差が多いためである。軽石流は水蝕に対する抵抗力が弱いために火山山麓特有の「田切り」地形が発達している。信越線御代田駅・平原駅、小諸市横古園付近がその典型である。最下部には前記の塚原泥流の質量混交の泥流堆積が不規則に堆積して基盤層をなしており滞水層となっている。この葛石遺跡から中佐都地区塚原・平塚・赤岩周辺の沼沢地堆積土壌の厚い地域が佐久市北部岩村田台地中では豊穡な農耕地でもある。

（白倉 盛男）

## 第2節 歴史的環境

円正坊遺跡群は東を久保田用水、西を濁川に侵蝕された台地上に立地し、萬石遺跡はその南端部に位置している。当遺跡群は古くから弥生～平安時代の土器・石器が採集されることで知られていたが、昭和54年に行われた清水田遺跡、昭和59年に行われた円正坊遺跡の発掘調査で弥生時代の竪穴住居址10棟、古墳時代の竪穴住居址8棟等が検出され、濃密な住居址分布を示す集落遺跡として再認識された。

円正坊遺跡群周辺には時代性・性格の似かよった広大な遺跡群が展開され、佐久平でも随一の遺跡密集地となっている。枇杷坂(7)、岩村田(12)、上の城(19)、一本柳(22)、北西の久保(28)、長土呂(5)、周防畑(4)、西近津(3)等の遺跡群がこれにあたり、過去に行われた数次にわたる発掘調査において検出された遺構・遺物は検出数、密集度ともに他の地域を圧倒的に上回る。これらの遺跡群は浅間火山から放射状に発展した佐久平特有の谷地「田切り」地形に刻まれた細長い台地上にある点でも共通しており、弥生時代以降、温暖で肥沃な谷地水田を利用した生産力をバックに大規模な農耕集落が経営されたことも推定されている。これらの濁川流路を



第2図 周辺遺跡分布図

中心とした4条の「田切り」地形とそれに伴う台地上の遺跡群が一樣に開ける砂田・塚原・赤岩地区は遺跡の未確認地帯になっており、その性格については低湿地性の生産遺跡、墓域等の推定がなされているが、調査された事例に乏しく実態は判明していない。その意味でこの遺跡未確認地帯に面し、連なる地帯に位置する鳶石遺跡の調査は、実態解明に対して重要な示唆を与えるものになることは言うまでもない。

参考文献 佐久市教育委員会 1984 「若宮遺跡」

林 幸彦 1986 「北西久保遺跡」『弥生文化の研究 7-弥生集落-』 雄山閣

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	区分	遺跡名	所在地	立地	年代					備考
					縄	古	古	平	中	
1	39	円正坊遺跡群	岩村田字円正坊・田中・鳶石・湧水田	古墳	○	○	○	○	○	昭和53・59年度発掘調査 湧水田・円正坊
2	28	常田屋敷遺跡群	常田字家原坂・榎野字長塚・砂畑地	古墳	○	○	○	○	○	
3	29	西近津遺跡群	長土高字西近津・字大原東・三原崎・小倉井物・常田字 長土・常田字大原東	古墳	○	○	○	○	○	昭和45年度発掘調査西近津
4	7	環跡遺跡群	長土高字環跡・上北原・北上東久保・浜石南門・東近 津池	古墳	○	○	○	○	○	昭和54・55・56年度発掘調査 環跡跡A・B・若宮
5	9	長土高遺跡群	長土高字長土原跡1・榎石・上殿	古墳	○	○	○	○	○	
6	38	下敷沢遺跡群	長土高字下敷沢・中敷沢	低地	○	○	○	○	○	
7	41	長尾沢遺跡群	岩村田字長尾沢	古墳	○	○	○	○	○	昭和60年度発掘調査
8	42	中久保和遺跡	岩村田字中久保池	低地	○	○	○	○	○	
9	43	熊倉池遺跡	岩村田字熊倉池	古墳	○	○	○	○	○	昭和61・62年度発掘調査
16	19	栗毛池遺跡群	小畑字栗毛池跡群・岩村田字栗毛池・伊波原・中敷沢・ 安田	古墳	○	○	○	○	○	昭和62年度発掘調査 栗毛 池・安田・中敷沢
11	44	上菅子遺跡	岩村田字上菅子池	低地					○	
12	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後・菅田池	古墳	○	○	○	○	○	昭和55・60・61・62年度発 掘調査 六供後
13	51-2	石巻城跡	岩村田字石巻池	古墳					○	昭和54年度一帯調査
14	51-1	玉城跡	岩村田字玉城	古墳					○	
15	51-3	黒岩城跡	岩村田字黒岩	古墳	○	○			○	昭和55・59年度発掘調査
16	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	第2段丘	○	○	○	○	○	昭和59年度発掘調査 下小平
17	49	上小平遺跡	岩村田字上小平	3段丘					○	
18	118	下伝石遺跡	岩村田字下伝遺石塚	低地					○	
19	117	上の城遺跡群	岩村田字舟通・上の城・西八日町池	古墳	○	○	○	○	○	昭和48・54・57年度発掘調査 上の城・西八日町
20	542	藤ヶ城跡	岩村田字東八日町・東上城	古墳					○	
21	104	宮の後遺跡	岩村田字宮の地	古墳	○	○	○	○	○	
22	105	一本榎遺跡群	岩村田字東一本榎・下福王寺・北一本榎池	古墳	○	○	○	○	○	昭和43・47年度発掘調査 東一本榎・北一本榎
23	103	宮の西遺跡	岩村田字宮の西	古墳	○	○	○	○	○	昭和56年度発掘調査
24	100	中嶋遺跡群	岩村田字中嶋	低地	○	○	○	○	○	
25	124	岩井堂遺跡	岩村田字岩井堂	低地	○	○	○	○	○	
26	102	松の木遺跡	岩村田字松の木	古墳	○	○	○	○	○	
27	101	上砂田遺跡	岩村田字上砂田池	古墳	○	○	○	○	○	
28	98	北西の久保遺跡	岩村田字北西の久保	古墳	○	○	○	○	○	昭和41・48・54・57・60年 度発掘調査
29	99	中西の久保遺跡	岩村田字中西の久保池	低地	○	○	○	○	○	
30	96	昭洋遺跡群	根ヶ井字昭洋池	古墳	○	○	○	○	○	
31	108	根ヶ井東原墓跡	根ヶ井字東原・東原上・崎澤	古墳					○	
32	91	根ヶ井遺跡	根ヶ井字根ヶ井	古墳					○	
33	92	畑一里塚遺跡群	岩村田字畑一里塚	古墳	○	○	○	○	○	昭和56年度発掘調査 畑一里塚・餅田
34	88	塚原屋敷遺跡群	根ヶ井字塚原池・屋敷	古墳					○	
35	97	伊勢田遺跡	根ヶ井字伊勢田	低地	○					
36	93	日向屋敷遺跡	根ヶ井字日向屋敷	低地	○	○	○	○	○	
37	94	根ヶ井伊勢田遺跡	根ヶ井字伊勢田	低地					○	
38	113	餅田古墳	岩村田字餅田 1887-1	古墳	○					
39	114	田原山古墳	岩村田字下塚本 1347	古墳	○					
40	112	善平治山古墳	岩村田字西善原 1720-2	古墳	○					
41	115	北西の久保古墳群	岩村田字北西の久保	古墳	○					昭和57・60年度第1-17 塚原 1・2号塚原
42	111	上嶋澤古墳群	根ヶ井字上嶋澤	古墳	○					1-3号塚
43	109	根ヶ井大塚古墳	根ヶ井字塚原 1179-1	古墳	○					

### 第三章 基本層序

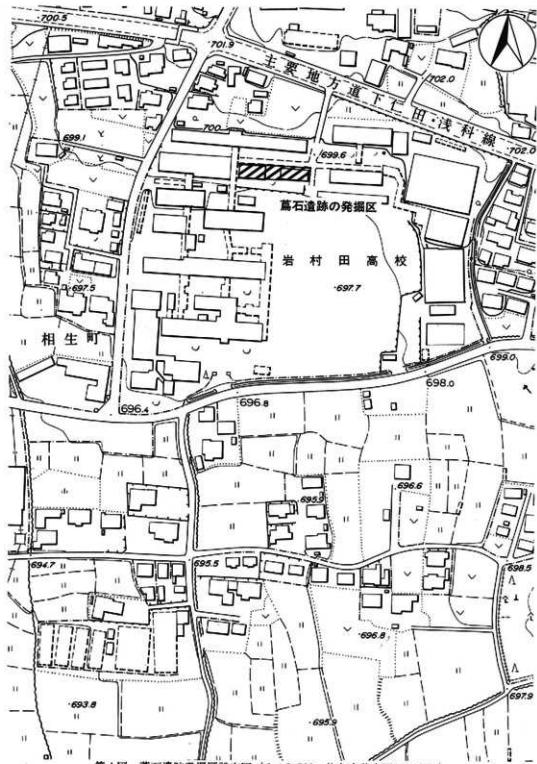
#### (第3図)

萬石遺跡所在地は、昭和30年代岩村田高校校舎建設に際して旧状の斜面を切り崩して盛土を行い現在のような平坦面が形成されている。この盛土は第5図では全体層序第I層にあたる。盛土は西から東へ向って徐々に厚さを増し、調査区北側では20~125cm、南側では45~180cmの層厚を示す。この第I層のあり方から、昭和30年代までの萬石遺跡における地形は調査区北側あ-1~6グリッドを基点として南東方向へ向って標高が下がる斜面を形成していたことがわかる。

旧状地形・第II層以下の層序をまず調査区北側から概観すると、あ-1~6グリッドにおいては東側ローム層上にVIII層の薄い堆積が認められる箇所があるものの第I層の盛土の直下で第XII層ローム層に達する部分が多く本調査区内では最も標高の高い地点となっている。あ-7グリッドに至ると第I・VIII層間に第V層鉄分が多量に含まれる土が、また、あ-8グリッドに至るとV層上に第II層等旧耕作土の存在が顕著となる。あ-9グリッドからは地形の落ち込みがより急になり、ローム粒子が含まれた第VIII層がローム粒子をあまり含まない第VIII層に変化、第VIII層下に漆黒の有機質土X層の堆積が始まる。また第V層の堆積は当グリッドの中央部にて終息し、変って第VI層(鉄分を多量に含む旧水田の床土と考えられる土)がVIII層上に薄い堆積を示す。あ-10・11グリッド間は調査区北側では最も地形が深く落ち込む部分と考えられ、第VIII層と第X層の間に第IX層・砂層が30cm内外の堆積を示し、X層下にはXI層・灰白色シルト質層の堆積も顕在化する。これがあ-12グリッドに至ると再び地形が上り始めIX層・砂層の堆積は薄くなり、XII層・シルト質層の堆積もみられなくなる。

次に調査区南側の層序を概観する。い-1~8グリッドにかけてのローム~シルト質層検出面は調査区北側と比べて120~140cmも低い。地表下120~190cmにかけては旧耕作土に関連する可能性が強い第II~第VI層が西から東へ向けて徐々にレベルが低くなるもののい-1~12グリッドにおいて一様に堆積している。これら旧耕作土下の状況はい-4~12グリッドにかけて黒褐色土VIII層が一様に堆積している。更にその下にはい-1~5グリッドにかけてローム・砂粒まじりの黒色有機質土X層がローム層上に20~35cmの堆積を示し、地形の落ち込みがやや深くなる。い-5グリッド中央からはローム・砂粒が全く混ざらない黒色有機質土X層の堆積に変わる。これに関連してい-6グリッドからは第X層上に砂層第IX層の堆積が始まり、地形が最も低くなると推定されているい-9・10グリッド間で砂層の堆積が最も厚く、複雑となる(X<sub>a</sub>層)。シルト質XI層存在はい-8~12グリッド間までは確実に認められた。





第4図 葛石遺跡発掘区設定図 (1:2,500 佐久市基本図14による)



以上、萬石遺跡の地層を概観したがある程度年代を推定し得るのは弥生土器が純粋に含まれていた第X層黒色有機質土のみである。第X層黒色有機質土、第XI層灰白色シルト質土は植物遺体も多量に含まれているため、い-9・12グリッドより土壌採取して花粉分析を行っており、古植生・水田耕作の有無を知る有効な手掛りとなろう。

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 検出された遺構・遺物の概要

遺構	土坑	2基	(内 訳	時期不明1基、弥生時代壺棺墓1基)
遺物	弥生土器	壺・甕・鉢・高坏		
	古墳時代	土師器	椀・坏	
	平安時代	土師器	坏、須恵器	坏・甕
	中世～現代	陶磁器		
	石器	砥石		

### 第2節 土坑

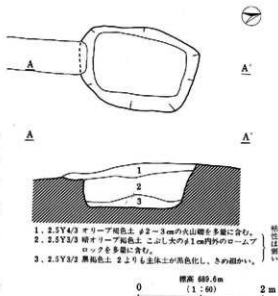
#### 1) 第1号土坑

遺構 (第5図、図版十)

本土坑は、あ・い-1・2グリッド内から検出された。北から南への斜面上に位置するため北半分はローム層第XII層、南半分は第IV層が確認面である。長軸長182cm、短軸長132cmのやや胴の張った長方形を呈し、長軸方位はN-17.5°-Eを示す。

確認面からの深さは最深部で72cmを測り、底面はおおむね平坦である。

覆土は三層よりなり、人為的な堆積と理



第5図 第1号土坑実測図

解される。遺物は少なく糸切り底の須恵器環2片、弥生土器1片が出土しているが、本址の所産期を直接あらわすものとは考え難い。

## 2) 第2号土坑(壺棺墓)

### 遺構(第6図、図版十一・十二)

本址はあ-い-4グリッド内に位置し、全体層序第Ⅷ層上において確認された。他遺構との重複関係はもたないが、遺構上部は耕作等による攪乱が著しく、また、北から南への斜面上にあるため、地山に若干の移動があったことも考慮しなければならない。

土坑の規模は東西の長軸長339cm、南北の短軸長270cmを測り、やや不整な楕円形を呈する。長軸方位はN-90°-Eをさし、ほぼ東西方向を向いている。

確認面からの深さは第2層により構築された底面で16.5cm~31cmを測り、南西側の側壁の残存状態がやや不良である。底面は若干の起伏を有するものの、概ね平坦に構築され、壁への立ち上がりは45~77°の傾斜面をもつ。第2層の構築面下の掘り方はやや起伏に富み確認面からは最深部で80cmを測る。

壺棺の検出状況 壺棺は坑内の中央からやや北東寄りに位置する。棺の本体にあたる大型壺はほぼ東西方向に口~底を向け、斜位に据え置かれている。地表に近い上部が後世に破壊されているため確実なことは言えないが、棺本体の壺7-1は往時から頸部以上が打ち欠かれており、その上に、別個体の胴部中位以上を打ち欠いた赤彩壺7-2を被覆して蓋をしていたと考えられる。蓋付壺棺を坑内に納めるにあたっては底面上に黒色土薄く盛り、その上に人頭大~拳大の浅間・平尾山系角礫安山岩を方形状に配列して棺を固定させるための受け口を作っている。

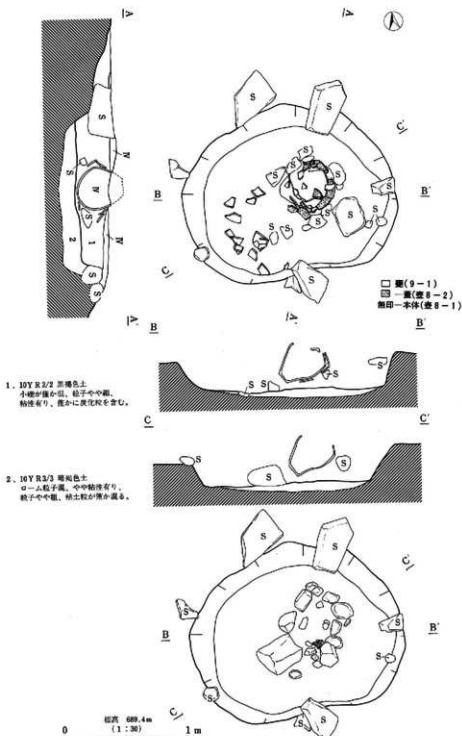
壺棺が設置された後は黒褐色土(第1層)が埋めもどされている。尚、棺内から人骨その他の副葬品は検出されなかった。

この他、坑内南西側には大型壺8-3の破片が散在している。また、土坑周縁部には偏平な大型の安山岩が横倒しになった状態で分布しているが、当時墓標として立石していたものか、当時から倒れた状態で配置されていたものかは判断し兼ねる。

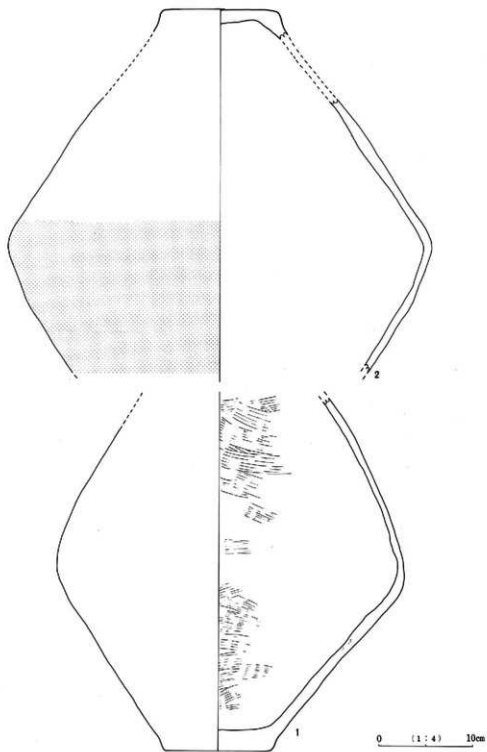
遺物 前述した弥生土器3個体がある。器種には壺・甕があり、各2点・1点を図化した。

壺7-1は棺本体となっていたもので、残存高でも37.5cmをはかる大型品である。胴部は所謂「無花果形」を呈し、頸部は太く構描横走平行線文が施されていたと考えられる。外面は赤色塗彩が施されず、ヘラミガキが丁寧に施されている。内面は磨減が著しい。壺7-2は蓋として使用された胴部中位の破片で、胴部中位を境として下位にかけてくびれをもつ。中位以上には赤色塗彩が施されている。

甕8-3は口縁部が弓状に外反する形態で頸部に構描簾状文、口~胴部に構描斜走直線文が施



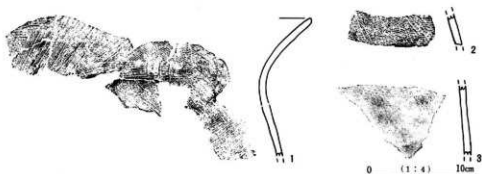
第6図 第2号土坑(蓋棺墓) 実測図



第7图 第2号土坑出土土器实测图

されている。

以上の出土土器の特徴から本址は弥生時代後期前半に位置づけられる。



第8図 第2号土坑出土土器拓影図

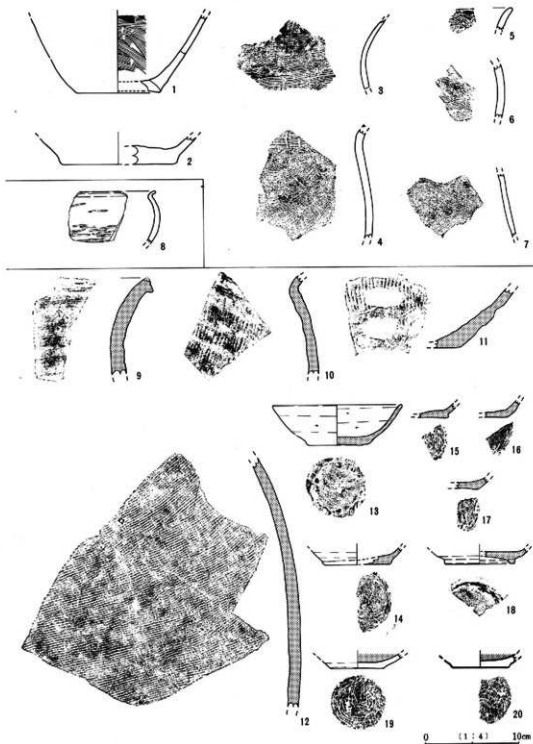
### 第3節 グリッド遺物 (第9～12図)

**旧耕作土(第II～VI層) 出土遺物** 地形の高い北側の、あグリッドに少なく、低い南側の、いグリッド内から多くの遺物が検出された。ほとんどが細片で地形の低い部分へ流入したものと見て良い。

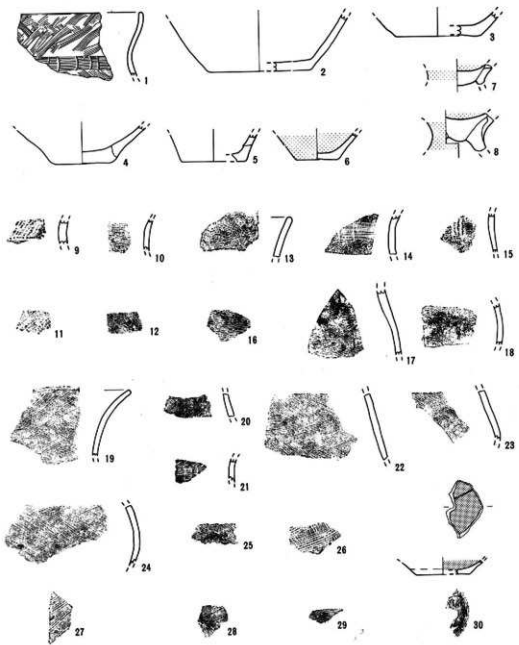
弥生土器・土師器・須恵器・陶器等各時期の遺物が混在する。弥生土器の器種には壺・甕・鉢・高坏・甗等がある。壺は赤彩品と無彩品が共存するが胴部に紋様をもつものはなく、大方が後期の壺と判断できる。甕は頸部に櫛描簾状文、口～胴部に波状文をもつ9-3～6等、斜走直線文をもつ10-7等があり、後期の甕である。高坏・鉢も同様の時期と考えられる。

古墳時代の土器は土師器坏9-8一点のみがみられる。平安時代と考えられる土器には土師器須恵器がある。土師器の器種には甕・坏があり、甕は所謂「武藏型」の薄手甕である。坏は内面黒色処理・丁寧な研磨されるもの9-19・20が多く、底部はいずれも回転糸切り未調整である。須恵器は土師器の量を凌駕する。甕・坏・高台付坏等がある。甕は口唇部に断面三角形の突帯をもつ9-9、胴部に平行叩きの施される9-10～12があり、内面に青海波はみられない。坏は底部がいずれも回転糸切り未調整である。この他、時期不明の陶器片が一片ある。

**VII・VIII層出土遺物** 地形が低くなる、あ-11・12、い-10・11グリッドに最も濃密な分布がみられた。弥生土器・平安時代の土器が混在するが平安以降の遺物の混入はなく、平安時代までに形成された地層と考えられる。弥生土器には壺・甕・鉢・高坏がある。壺は赤彩品が無彩品を凌駕し、頸部紋様は櫛描矢羽状文10-9、斜格子目文10-11、櫛描直線文10-10の他、天竜川水系座光寺原式にみられる櫛描円弧文10-12もある。甕は櫛描斜走文が施される10-1・19～29と櫛描

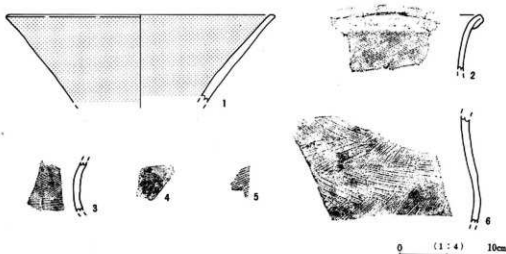


第9图 葛石遺跡旧耕作土(第II~VI層)出土土器実測图·拓影图



第10図 萬石遺跡第Ⅶ・Ⅷ層出土土器実測図・拓影図

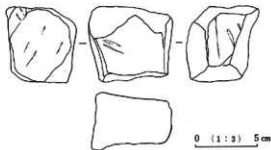
波状文が施される10-13~18がある。高坏10-7・8、鉢10-6は赤彩品で他の破片も赤彩品が多い。以上の弥生土器はいずれも後期の所産と考えて良い。平安時代土器は弥生土器に比してかなり少ない。土師器・須恵器がある。土師器は甕・坏があり、坏は内面黒色処理・暗文をもつ10-



第11図 葛石遺跡第IV・V層出土土器実測図・拓影図

30の他、内面黒色処理、回転糸切りのものが多い。須恵器は坏があり、底部回転糸切り未調整が主体である。

**第IX・X層出土遺物** 全体の遺物量は遺跡の総体で見ると少ないが、弥生土器が純粋に包含されていた。弥生時代に形成された地層の可能性は十分にある。壺・甕・高坏がある。壺は赤彩



第12図 葛石遺跡第VII層出土土器実測図

のみである。甕は衝刺斜定文が施されるもの11-2~6のみで、折り返し口縁が施される2はやや特異な形態になると考えられる。高坏は11-1の他、赤彩品のみである。弥生土器はいずれも後期の所産と考えられる。

## 第V章 調査のまとめ

今回の調査で検出された遺構は弥生時代の壺棺墓1基、時期不明の土坑1基、遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器などがある。このうち、各地区各層内における遺物の分布状況については第IV章第3節で詳述し、その分析の結果、第X層は、弥生土器が純粋に包含される弥生文化層である可能性が強いとの結論が得られた。第X層については古植生および水田址の有無を知るために花粉分析調査がなされており、その結果については付編 パリノ・サーヴェイ社の報告を参照されたい。ここでは弥生時代の壺棺に焦点をあて、調査のまとめとしたい。

第2号土坑（壺棺墓）をめぐる



第2表 萬石遺跡出土土器観察表

検出番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
8-1 (D2)	弥生 甕	— (37.5) 11.2	胴部は中位で大きく張り、無花巻状を呈する。蓋みが滑しい。 胴部最大径55cm	内) 底部ヘラナダ、胴部傾斜位のハケノ調整が僅されるが磨減著しい。 外) 細かい傾斜位の丁寧なヘラミガキ。	粘土: 密 焼成: 良好 色調10YR8/4 (浅灰) No21 完全無染
8-2 (D2)	弥生 甕	— (29.0)	胴部は中位で大きく張り、幾分無花巻形を呈するが、下部に若干のくづれをもち始めるように見える。 胴部最大径45cm	内) 磨減著しく不明 外) 胴部中位まで赤色塗彩・横位ヘラミガキ、以下、ヘラミガキされるが磨減著しい。	粘土: 密 焼成: 良好 色調10YR8/4 (浅灰) No31-17 磨減B
10-1 土師作土	弥生 甕	— (8.2) 8.8	—	内) 胴位ハケノ調整のち底面にナダ。 外) 胴部に丁寧な横位ヘラミガキ、底部近くは斜位ヘラミガキ。	粘土: 密 焼成: 良好 色調7.5YR6/6 (黄赤) あ・4回・IV層 磨減B
10-2 土師作土	弥生 甕	— (2.8) (10.4)	—	内) 磨減著しく不明。 外) 胴位ヘラミガキ、底部近くは横位ヘラミガキ。	粘土: やや粗 焼成: 良好 色調5Y8/6 (橙) あ・4回層 磨減B
10-8 土師作土	土師作 甕	—	口縁部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。	内) 丁寧な横位ヘラミガキ。 外) ヨコナダのち、粗な横位ヘラミガキ。	粘土: 密 焼成: 良好 色調2.5Y7/6 (橙) あ・4回層 磨減B
10-13	須恵系 土師作土	(13.1) 4.3 6.4	—	内) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。 外) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。	粘土: やや粗 焼成: 良好 色調2.5Y7/6 (橙) あ・4回層 磨減B
10-14	須恵系 土師作土	— (1.6) (6.8)	—	内) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。 外) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。	粘土: 密 焼成: 良好 色調5YR6/6 (橙) あ・3回・IV層 磨減B
10-18	須恵系 土師作土	— (1.7) (7.2)	—	内) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。 外) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。	粘土: 密 焼成: 良好 色調10YR2/2 (黄赤) あ・3回層 磨減B
10-19	土師作土	— (1.5) 5.7	—	内) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。 外) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。	粘土: 密 焼成: 良好 色調10YR7/6 (黄赤) あ・4回・IV層 磨減B
10-20	土師作土	— (1.4) (5.8)	—	内) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。 外) 胴部短く強く外反し、体一底部は中位状で丸底を呈すると考えられる。	粘土: 密 焼成: 良好 色調10YR4/3 (赤い黄赤) あ・3回・IV層 磨減B
11-1	弥生 甕	— (6.7)	口縁部は内角状に直立する。	内) 丁寧な横位のヘラミガキ、口唇部のみヨコナダ。 文) 胴部10cm一帯の磨減調整、後6本一帯基本の磨減調整を縦文を上から下へ横調整、右回りで行う。	粘土: 密 焼成: 良好 色調: 明赤褐 あ・7回層 底片B
11-2	弥生 甕	— (5.5) (10.4)	—	内) 横位ヘラミガキ、磨減著しい。 外) 底部ヘラミガキ、胴部縦位ヘラミガキ。	粘土: やや粗 焼成: 良好 色調7.5Y3/6 (明橙) 磨減B あ・4回層
11-3	弥生 甕	— (2.5)	—	内外面磨減著しく不明。	粘土: 密 焼成: 良好 色調2.5Y7/6 (橙) あ・10回層 磨減B
11-4	弥生 甕	— (3.7) 5.8	—	内) 横く丁寧な斜位ヘラミガキ。 外) 横く丁寧な横位ヘラミガキ。	粘土: 密 焼成: 良好 色調2.5YR5/6 (明橙) あ・10回層 磨減B
11-5	弥生 甕	— (2.9) (6.8)	—	内) 斜位ヘラミガキ   磨減著しい。 外) 縦位ヘラミガキ	粘土: 密 焼成: 良好 色調10Y2.5/3 (赤い黄赤) あ・10回層 磨減B
11-6	弥生 甕	— (2.9) 4.7	—	内) 赤色塗彩・斜位の丁寧なヘラミガキ。 外) 赤色塗彩・横斜位の丁寧なヘラミガキ、底部丁寧なヘラミガキ。	粘土: 密 焼成: 良好 色調7.5YR7/6 (橙) あ・5回層 磨減B
11-7	弥生 高坏	—	盤状のホゾ	内) 厚部赤色塗彩。ヘラミガキ、磨減不明。 外) 赤色塗彩・縦位ヘラミガキ。	粘土: 密 焼成: 良好 色調5 YR7/6 (橙) 磨減A あ・10回層
11-8	弥生 高坏	— (4.0)	—	内) 厚部赤色塗彩・ヘラミガキ、胴部ナダ?。 外) 赤色塗彩・縦位のヘラミガキ。	粘土: 密 焼成: 良好 色調7.5YR5/6 (赤い黄赤) あ・11回層 磨減A
11-20	土師作土	— (1.5) (5.4)	—	内) 黒色処理・研磨されず短文一帯僅される。 外) ログロココナダ	粘土: 密 焼成: 良好 色調7.5YR8/4 (黄赤) あ・10回層 磨減B
12-1	弥生 高坏	— (28.6) (9.4)	—	内) 赤色塗彩・丁寧なヘラミガキ。 外) 赤色塗彩・横位の丁寧なヘラミガキ。	粘土: 密 焼成: 良好 色調10Y2/3 (赤い黄赤) あ・9文層 磨減B

立地 萬石遺跡は黄褐色ローム層上にIV層黒褐色土が厚く堆積し始める斜面に立地し、北西部の地形の高い部分からは壱椀墓等の遺構が検出され、南東部の地形の低い部分からは湧水が往時から激しかったこともあり遺構が検出されなかった。本遺跡の北東部340mの地点には弥生～古墳時代の密集した集落址、清水田遺跡があり、本遺跡との比高差は約10mを測る。従って清水田遺跡から本遺跡北西部にかけては徐々に標高が低くなる、地続きの緩斜面台地状になっており住居址・墓址等の集落が形成され、本遺跡南東部からは地形が急激に落ち込んで低湿地帯を形成して

いたと推測できる。更に推し図れば、清水田遺跡は弥生時代において居住地、台地突端部の本遺跡北西部周辺は墓域が展開されていた可能性も指摘できるのである。台地突端の低湿地が形成され始める地形上からは周防畑B遺跡のように弥生時代の墓群が形成されている例(林 1982)もあり、本遺跡において壺棺が存在し、住居址分布がみられなかったという事実は周防畑B遺跡の例と近似しており、該期の集落の内部構造を知る上で貴重な示唆を与えるものである。

規模・形態 339×270cmの不整楕円形の底面が平坦に構築された土坑内に配石を行い、配石内に壺棺を斜位に納めて土を埋めもどしている。壺棺の形態は棺本体に別個体の壺の胴中位～底部を被覆した蓋付壺棺で、棺内から人骨・副葬品は検出されなかった。

時期 所謂「無花果形」胴部の無彩大型壺と、胴中位に外稜をもちはじめの赤彩壺が共存している。周防畑B遺跡出土資料と近似する様相を示すことから、佐久地方では吉田式の新相、後期前半でも新しい段階(小山 1987)に位置付けられる。

他資料との比較 千曲川水系における弥生時代の壺・甕棺の検出例は本遺跡の他第3表のように佐久市北西の久保遺跡(小山 1987)から1例、周防畑B遺跡(林 1982)から3例、戸坂遺跡(小山 1984)から1例、竹田峯遺跡(三石・高村 1986)から1例、長野市屋地遺跡(大川他1977)から2例、塩崎遺跡群松節遺跡(矢口 1987)から1例、篠ノ井遺跡群聖川堤防地点(青木 1984)から1例、中野市安源寺遺跡(金井他 1979)から1例、合計11例が報告されている。

時期別にみると北西の久保例のみが中期後半で、他はすべて後期に位置する。中期後半の墓制が今一つ不鮮明な状況ではあるが、壺・甕棺葬は千曲川水系において後期に特徴的な墓制の一つであったと言える。

立地についてみると住居群からは隔絶された微低地に位置する例が(周防畑B、屋地、本例)住居群内に位置する例(竹田峯、安源寺)、住居群内のしかも住居址内に付設される例(北西の久保、塩崎遺跡群松節)、環濠内に設けられる例(戸坂)、方形周溝墓溝内に設けられる例(篠ノ井遺跡群聖川堤防)など様々で立地に一定の傾向は見い出せない。

壺棺の形態 周防畑B遺跡2号周溝墓主体部、竹田峯遺跡、安源寺遺跡が単棺、本例も含めた他の10例は蓋付壺棺である。単棺の場合、埋葬用と断定し得る根拠に乏しいため発見例が少ないのかもしれないが、一応蓋付の形態が多いと言えることができようである。

人骨 壺棺内から人骨が検出されたのは竹田峯遺跡、塩崎遺跡群松節遺跡の2例で、遺存例は少ない。壺棺内における人骨の検出例が少ないのは全国的にみても同様である。従って、壺棺の被葬者を明確に限定できていないのが現状であるが、近年竹田峯の壺棺内から胎児(生後6ヶ月位)が検出されたことにより、千曲川水系における壺棺には胎児・幼児なども多く被葬の対象となっている可能性が強まった。成人を対象とする洗骨葬の有無については今のところ明確でない。

副葬品 周防畑B2号周溝墓・26号土壙、竹田峯、塩崎遺跡群松節、篠ノ井遺跡群聖川堤防など

からガラス小玉をはじめ管玉など玉類の数点の検出例があるが、本例のように副葬品を全くもない例も多い。副葬品の玉類は棺内に1~10個納められるのが通例で、あまり多数が副葬される例はない。従って、これらの玉類は首飾り、腕輪等の装飾具として用いられたのではなく、何らかの祭祀的意味合いをもって供膳されたものと理解される。

以上、冨石遺跡の壺棺墓を他遺跡の検出例と比較検討を行ったが、立地・規模・形態・人骨・副葬品の有無など千曲川水系既報告資料と大方の点で大きな相違を示さない一般的なものであることがわかった。今後は、該期における周溝墓・土坑墓など他の墓制との関連性にも注意を払いながら、千曲川水系の壺棺墓の位置付けを行うことが肝要と考える。(小山)

第3表 千曲川水系壺棺墓集成

番号	遺跡名	遺跡名	立地	所在地	時期	形	器	人骨・副葬品その他	
1	北西の久保	Y 115 住内	吉地	佐久市羽村田北西の久保	弥生中期後半	壺付壺棺	1個体(打ち欠いて)	なし	
2	周防畑B	2号円形周溝墓内	窪低地	佐久市箕土呂	弥生後期前半	単棺		土器・ガラス小玉1	
3	周防畑B	26号土塚	*	*	*	壺付壺棺	2個体にて	大型土器・ガラス小玉 棺内より4個	
4	周防畑B	27号土塚	*	*	*	壺付壺棺	2個体にて	なし	
5	戸坂	塚	窪	吉地	佐久市新子館	弥生後期後半	壺付壺棺	2個体にて	なし
6	冨石	2号土塚	台地突縁窪低地	佐久市羽村田	弥生後期前半	壺付壺棺	2個体にて (安山岩で支える)	なし	
7	竹田	墓	2号特殊遺構	吉地	佐久市坪野	弥生後期後半	単棺?		結光骨・管玉2 ガラス小玉2
8	周防畑	1号壺棺	陥状地	長野市松代町東条	弥生後期前半	壺付壺棺	2個体にて (瓦・山石で支える)	なし	
9	壺塚	2号壺棺	陥状地	*	*	壺付壺棺	2個体にて (瓦・山石で支える)	なし	
10	塚崎遺跡群松原	77号住内	自然堤防	長野市塚崎	弥生後期後半	壺付壺棺	1個体	ガラス小玉9 熱石製管玉1・人骨3	
11	塚ノ井遺跡群堀川堤防	4号埋溝墓周溝内	自然堤防	長野市塚ノ井	弥生後期後半	壺付壺棺	2個体	ガラス小玉数点	
12	安源寺田	塚	自然堤防	中野市	弥生後期後半	単棺?		なし	

引用参考文献

大川 清 1977 『屋地遺跡』 日本竊業史研究所  
 金井汲二他 1979 『安源寺III』 中野市教育委員会  
 林 幸彦 1982 「周防畑B遺跡」 『長野県史 考古資料編・主要遺跡(東北信)』  
 青木和明 1984 「篠ノ井遺跡群聖川堤防地点」 『第5回三県シンポジウム古墳出現期の地域性』  
 小山岳夫 1984 「戸坂遺跡」 『第5回三県シンポジウム古墳出現期の地域性』  
 高村博文・三石宗一他 1986 『西裏・竹田塚』 佐久埋蔵文化財調査センター  
 矢口忠良他 1986 「塚崎遺跡群IV-市道松節-小田井神社地点遺跡-」 長野市教育委員会  
 小山岳夫 1987 『北西の久保-南部台地上の調査-』 佐久埋蔵文化財調査センター  
 小山岳夫 1987 「弥生土器編年の確立に向けて(その1)-佐久地方の吉田式土器の認識-」  
 『佐久考古通信 No42・43合併号』 佐久考古学会

# 付 編

## 萬石遺跡試料花粉分析報告

ハリノ・サーヴェイ株式会社

### 1 遺跡の概要及び分析試料

萬石遺跡は佐久市岩村田に所在し、弥生から平安時代を中心とする大集落址を内包する円正坊遺跡群の南端部に位置する。地表下約200~220cmの黒色有機質土層(第X層)は弥生後期の土器をほぼ純粋に包含する地層であり、佐久地方では初めて時代判定が可能な文化層として把握されたものである。今回は、この黒色有機質土層およびその直下の灰白色シルト質土層(XI層)について、花粉分析により古植生の解析と栽培種のイネ科花粉の有無及び稲作の可能性について解析することを目的とする。各試料の番号、採取地点、層位などについて表1に示す。

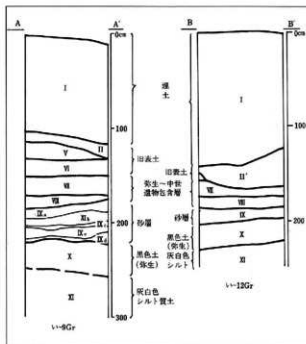


図1 い-9・12Gr柱状断面図

表1 萬石遺跡花粉分析試料表

番号	採取地点	層位	土質
1	い-9Gr	VIII	黒褐色シルト質砂
2	い-9Gr	X上	黒色砂質シルト
3	い-9Gr	X下	黒色砂質シルト
4	い-12Gr	X	黒色砂混じりシルト
5	い-12Gr	XI	にぶい黄褐色シルト質砂

### 2 分析方法および結果の表示法

表2 馬石遺跡試料 花粉分析結果

種類 (Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5
<b>樹木花粉</b>						
モミ属	-	-	13	4	-	-
ツガ属	1	-	4	7	-	-
トウヒ属	-	-	1	-	-	-
マツ属(雄雄管束型)	-	-	5	2	-	-
コウヤマキ属	-	-	1	-	-	-
スギ属	1	-	8	1	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	8	3	-	-
サワグルミ属	-	-	1	-	-	-
クルミ属	-	-	22	7	-	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	11	6	-	-
ハシバミ属	-	-	-	47	1	-
カバノキ属	-	-	-	4	-	-
ハンノキ属	-	-	8	5	-	-
ブナ	-	-	2	5	-	-
イヌブナ	-	-	5	5	-	-
コナラ亜属	7	1	70	24	-	-
アカガシ亜属	-	-	6	4	-	-
クリ属	-	-	6	-	-	-
シイノキ属	-	-	-	1	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	1	13	8	-	-
モチノキ属	-	-	1	-	-	-
トチノキ属	-	-	1	-	-	-
ウコギ科	-	-	-	1	-	-
エゴノキ属	-	-	-	1	-	-
トネリコ属	-	-	1	1	-	-
<b>草本花粉</b>						
イネ科	7	-	86	53	-	-
カヤツリグサ科	20	-	15	12	-	-
ミズアオイ属	-	-	-	9	-	-
クワ科	-	-	1	3	-	-
ヤナエタデ属-ウナギツカミ節	2	-	2	1	-	-
アザミ科	-	-	-	2	-	-
ナデシコ科	1	-	-	4	-	-
カラマツソウ属	-	-	1	-	-	-
アブラナ科	-	-	1	-	-	-
ソラマメ属	-	-	1	1	-	-
フウロソウ属	-	-	-	14	-	-
セリ科	-	-	1	2	-	-
シソ科	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	15	1	37	22	-	-
キク亜科	2	-	17	5	-	-
タンポポ科	-	-	-	1	-	-
アオイ科	-	-	1	-	-	-
不明花粉	2	-	7	4	-	-
<b>シダ類孢子</b>						
ゼンマイ属	1	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	12	2	21	24	-	-
<b>合計</b>						
樹木花粉	9	2	187	136	1	-
草本花粉	47	1	164	129	0	-
不明花粉	2	0	7	4	0	-
シダ類孢子	13	2	21	24	0	-
総花粉・孢子	71	5	379	293	1	-



花粉・胞子化石の抽出方法は、下記の手順で行った。

試料15~25g秤量し、フッ化水素酸処理により試料中の珪酸質を溶解、試料を泥化する。次に重液 (ZnBr<sub>2</sub>溶液 比重2.2) を用いて鉱物質と有機物を分離させ、浮上した有機物を濃集する。粗大有機物を取り除くために250 $\mu$ mの篩を用いて篩別し、篩下の有機物残渣にアセトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。処理後の残渣はよく攪拌し、マイクロピペットで適量を取り、グリセリンで封入する。

検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類 (Taxa) について同定・計数した (表2)。

古植生変遷の検討を行うために、計数の結果にもとづいて花粉化石群集組成図を作製した (図1)。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉とシダ類胞子は総花粉胞子数から不明花粉数を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出した。ただし、樹木花粉の合計が100個体未満の試料についてはデータが歪曲される恐れがあるので図示しなかった。これらの図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が明確でないものである。また、No. 3, 4 試料については、炭化した植物遺体が非常に多かったこととイネ科花粉化石の保存状態は必ずしも良くなかったので、ノマルスキー微分干渉装置付顕微鏡を用いてのイネ属の同定はイネ科花粉50個体について行った (表3)。

表3 礫石遺跡イネ属同定結果 (単位: %)

試料番号	採取地点および層位	イネ属	他のイネ科	不明*
3	い-9Gr X層下	16	46	38
4	い-12Gr X層	24	48	28

\*: 花粉粒の外膜が分解されイネ属の同定ができなかったイネ科花粉

### 3 分析結果および考察

検出された花粉・胞子化石は、樹木花粉が25種類、草本花粉が17種類、シダ類胞子が2種類である。なお、No. 1, 2, 5の各試料からはほとんど花粉・胞子化石が産出されなかった。花粉・胞子化石は、保存状態が比較的悪いもの (外膜が分解されて薄くなっているものと褐色から黒褐色を呈しやや炭化したもの) と比較的保存の良いものとが混在していた。保存状態の悪い花粉・胞子化石の内外膜が分解されて薄くなっているものは堆積後の微生物などの作用によって分解を受けたものと考えられ、褐色から黒褐色を呈したものは火などによる高温を受けた炭化したものと考えられる。以下に樹木花粉を100個体以上産出したNo. 3と4について述べる。

#### No. 3 試料 (い-9Gr X層下)

コナラ亜属が高率に、モミ属・クルミ属・クマシテ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属・アカガシ亜属などを比較的高率に出現する。そのほかに、スギ属・マツ属複維管束亜属・ツガ属などを

低率に伴う。草本花粉ではイネ科が高率に、ヨモギ属・キク亜科・カヤツリグサ科などを比較的高率に伴う。草本花粉が全体の約半分を占めることから比較的開けた空間が存在し、イネ科・ヨモギ属・キク亜科・カヤツリグサ科などが分布していたと考えられる。イネ属の同定結果、後背地の植生はナラ類が優占し、クルミ属・クマシデ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹、針葉樹のモミ属・マツ属複雑管束亜属・スギ、照葉樹のアカガシ亜属などが分布していたと推定される。

#### No.4 試料 (い-12Gr X層)

ハシバミ属とコナラ亜属が高率に、クルミ属・ニレ属-ケヤキ属・ブナ属(ブナとイヌブナ)などを比較的高率に出現する。草本花粉では、イネ科が高率に、ヨモギ属・キク亜科・カヤツリグサ科・ミズアオイ属などを比較的高率に出現する。草本花粉の中でミズアオイ属は水深の浅い沼地または湿地に分布する水生植物である。草本花粉が全体の約半分を占めることから比較的開けた空間が存在し、イネ科・ヨモギ属・キク亜科・カヤツリグサ科・ミズアオイ属などが分布していたと考えられる。そして、水生植物の出現により沼地または湿地などの水域の環境が存在していたと推定される。後背地の植生は、ナラ類が優占し、クルミ属・クマシデ属-アサダ属・ニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹、針葉樹のモミ属・マツ属複雑管束亜属・スギ、照葉樹のアカガシ亜属などが分布していたと推定される。なお、ハシバミ属は高率に出現しているが、検出された花粉粒が炭化しているものが多いこと、弯から落ちた状態で保存されたような多数の花粉粒の塊が検出されることなどから、近傍に局部的に分布していたと考えられる。

#### イネ属について

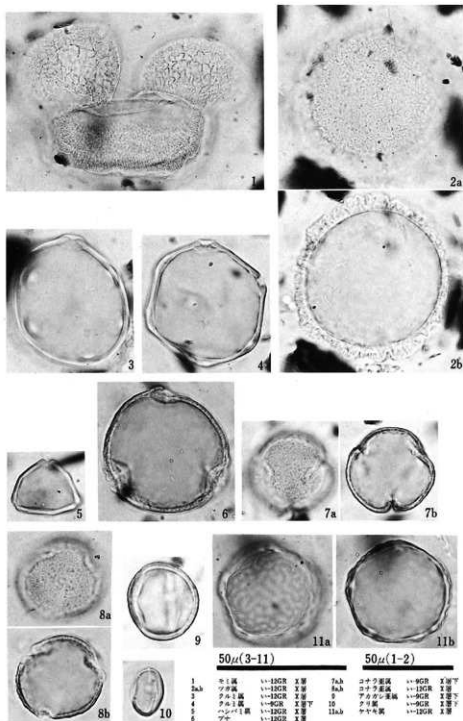
イネ属の同定の結果、イネ科花粉の内No.3では16%、No.4では24%がイネ属であった。花粉分析結果でイネ科花粉のうちイネ属の割合が30%以上を示すと、現在のような集約的稲作が近傍でおこなわれていたとされている(鈴木・中村, 1977)。これにしたがえば、No.3, 4ともに近傍において現在のような集約的稲作が行われていなかったことになる。しかし、イネ属の花粉が20%前後検出されていることから、現在のように集約化していない形態で稲作が行われていたかもしれない。なお、今回はイネ科花粉の保存状態が悪く充分な解析に至らなかったため、稲作の有無についてはさらに今後のデータの蓄積とともに再検討することが望まれる。

#### 引用文献

鈴木功夫・中村 純 1977 稲作の起源と伝播に関する研究-中間報告, 文部省科研費特定研究「古文化財」, 中村 純 編, P.2~30

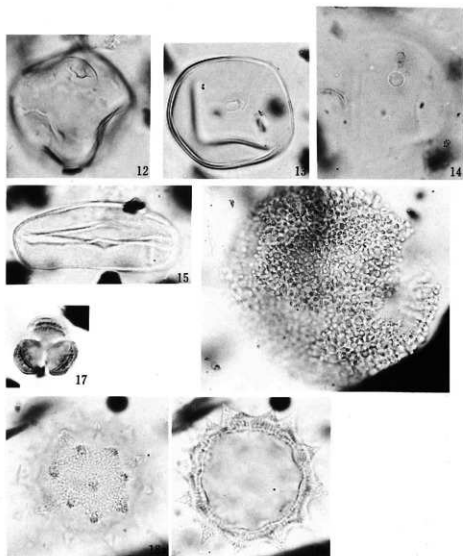


図版 1



図版 1 萬石遺跡試料花粉化石顕微鏡写真

図版 2

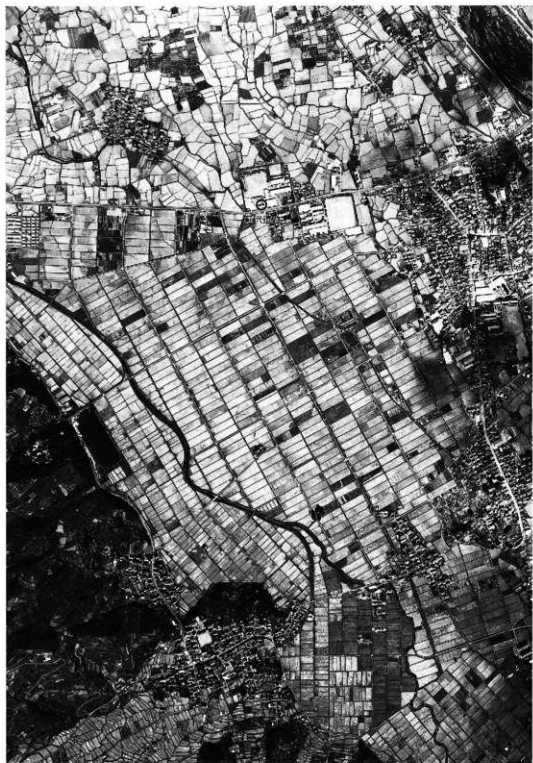


50 $\mu$ (12-15, 17-18)

50 $\mu$ (16)

12	イ科科	11-9GR	X 解下
13	イ科科	11-12GR	X 解
14	イ科科	11-13GR	X 解
15	1. アオキ科	11-12GR	X 解
16	アウロウツ科	11-12GR	X 解
17	サトウ科	11-9GR	X 解下
18a,b	サトウ科	11-12GR	X 解

図版 2 高石遺跡試料花粉化石顕微鏡写真



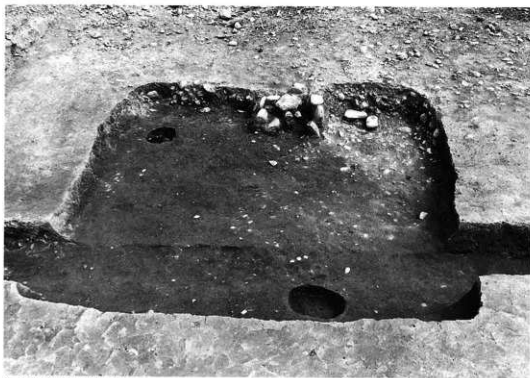
蕨沢遺跡付近航空写真



A地区全景（東方より）



1. B地区全景（東方より）



2. 第1号住居址（西方より）



1. 第1号住居址礫群検出状況 (西方より)



2. 第1号住居址カマド (西方より)



1. 第1号住居址カマド（西方より）



2. 第2号住居址（西方より）



3. 第3号住居址（北方より）



4. 第4号住居址（西方より）



5. 第5号住居址（東方より）



6. 第6号住居址（南方より）



7. 第6号住居址罅群検出状況（南方より）



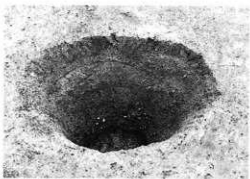
8. 第6号住居址遺物出土状況（南方より）



1. 第6号住居址 (東方より)



2. 第7号住居址 (西方より)



3. 第1号土坑 (西方より)



4. 第2号土坑 (東方より)



5. 第3号土坑 (北方より)



6. 第4号土坑 (南方より)



7. ピット群 (北方より)



8. P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub> (南方より)





1. 第1号住居址出土遺物

10-1



2. 第1号住居址出土遺物

10-6



3. 第1号住居址出土遺物

10-7



4. 第1号住居址出土遺物

10-8



5. 第1号住居址出土遺物

10-9



6. 第1号住居址出土遺物

10-10



7. 第1号住居址出土遺物

10-11



8. 第1号住居址出土遺物

10-12



9. 第1号住居址出土遺物

10-13



10. 第1号住居址出土遺物

10-14



11. 第1号住居址出土遺物

10-15



10-18

1. 第1号住居址出土遺物



13-1

2. 第2号住居址出土遺物



13-4

3. 第2号住居址出土遺物



16-1

4. 第3号住居址出土遺物



23-1

5. 第6号住居址出土遺物



23-2

6. 第6号住居址出土遺物



23-3

7. 第6号住居址出土遺物



25-2

8. 第6号住居址出土遺物



31-1

9. A・B地区出土遺物



31-3

10. A・B地区出土遺物



31-5

11. A・B地区出土遺物



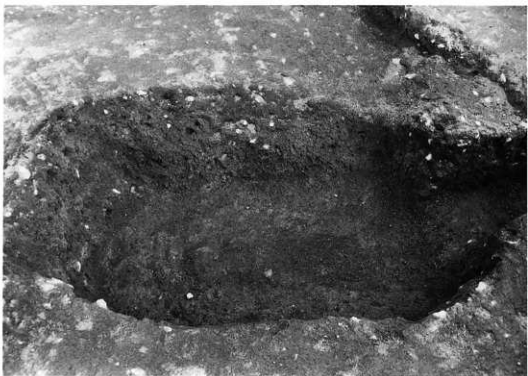
1. 蔦石遺跡全体写真（東方より）



2. 蔦石遺跡 いー9グリッド層序



1. 蔦石遺跡 い-9グリッド層序



2. 第1号土坑 (西方より)



1. 第2号土坑〈壙墓〉(北西より)



2. 壙墓検出状況(西方より)



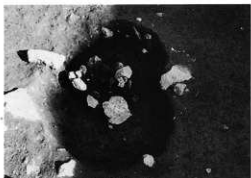
3. 壙墓検出状況(南方より)



4. 壙墓検出状況(南西より)



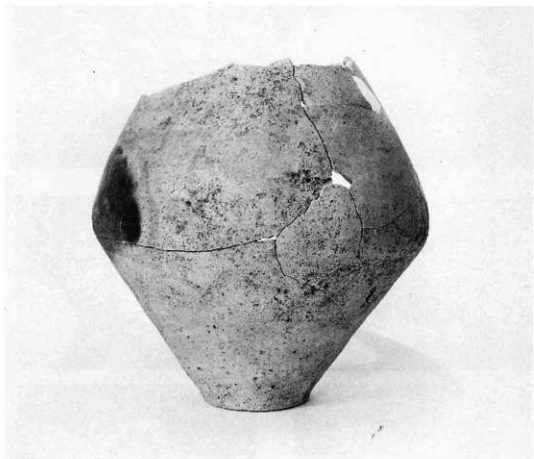
5. 壙墓検出状況(北方より)



1. 靈棺検出後の配石（西方より）



2. 靈棺検出後の配石（西方より）



3. 第2号土坑出土土器（靈棺本体）



4. 第4層出土石器（12-1）

## 後 記

今回、県立野沢北高等学校敷地内に特別教室棟及び音楽棟建設工事事業、また、県立岩村田高等学校敷地内に電子機械科棟建設工事事業の計画がなされ、これに伴う緊急発掘調査を行うことになりました。

本調査に関して、調査各段階においてご配慮をいただいた佐久市教育委員会、薮沢遺跡においては県立野沢北高等学校及び畠山武市氏等、萬石遺跡においては県立岩村田高等学校の深いご理解と発掘調査中数々のご協力によって調査を充実したものにすることが出来たことを心から御礼申し上げます。また、何かと多忙のなかを現地調査に続いて整理調査にと参加して下さった協力者の皆様の熱意と、調査報告書作成において諸鑑定及びご意見をいただいた地元研究者各位のご指導とご協力により、ここに報告書を発行できることを改めて感謝の意を表する次第です。

薮沢遺跡は、三塚遺跡、辻遺跡、長明塚遺跡、東五反田遺跡に囲まれた地点に位置し重要な遺跡で、本調査は校地内の教室棟建設に伴う緊急調査のため調査対象面積も小さかったが、検出された遺構は竪穴住居址7棟・土坑4基・ピット群1群。出土遺物としては、土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器等でありましたが、土器分析・佐久における平安時代編年考察の貴重な資料を得ることができました。

萬石遺跡は、岩村田高等学校敷地内にあり円正坊遺跡群に属し、弥生時代から平安時代の遺物が濃密に分布する地域であります。今回、電子機械科棟の建設工事に伴う緊急発掘調査で校舎に挟まれた調査面積も小さかった調査ですが、弥生時代の壟棺墓等が検出されました。これは、佐久市に於ては非常に貴重な資料であり、住居址群と墓群、弥生後期における周溝墓・土坑墓など他の墓制との関連など、今後の課題も与えられました。その意味からも今後、さらに各位のご指導を賜わり、本報告書を総合研究の足掛りとしたい所存です。 (黒岩忠男)

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	『西義・竹田等』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	『池塚・西柳堂』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	『芝 園』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	『新 町 II』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	『飯上屋敷、下川原・光明寺』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	『浪瀧・屋敷前・西片ケ上・曲尾田・曲尾I』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	『高師町・西大久保』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	『北西ノ久保』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	『梨の木』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	『曾田田、新町田・宮の上・中曾根・藤塚』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第11集	『長峯古墳群』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第12集	『西松ふた』

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第13集  
長野県佐久市

薊 沢 遺 跡  
円正坊遺跡群  
葛 石 遺 跡

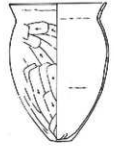
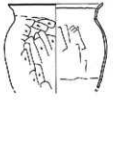
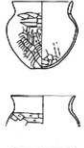
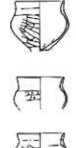



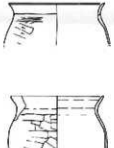

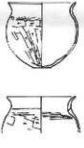

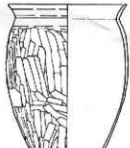
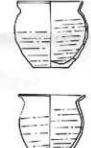
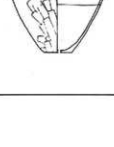

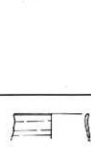
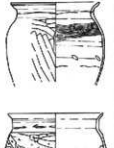
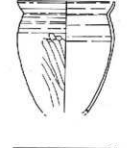

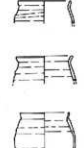




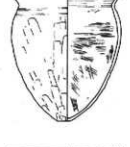

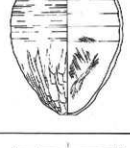

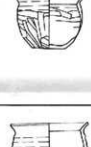

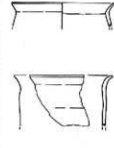


1988年3月

編 集 者 佐久埋蔵文化財調査センター  
発 行 者 佐久市教育委員会  
印 刷 所 信毎書籍印刷株式会社

---



佐久地方の平安時代土師器甕類相対編年図

時期	甕 A				甕 B			甕 C I	羽釜	遺構名
	甕 A I	明細図(口)の形状口縁	甕 A II		甕 B I	甕 B II	甕 B III			
古										前田Ⅷ期
										
第1段階										野火付 9住~ 15住 宿上屋敷 2住
										
第2段階										蛇塚口 第2次 曲尾Ⅲ 十二山
										
										
										
新										曾根城 3住 5ヶ城 3住
第3段階										宿上屋敷 5住
第4段階										北西ノ久保 第1次 22住



佐久地方の平安時代坏・埴・皿類相対編年図

時期	坏	坏A					坏B				埴				皿				遺構名
		坏A I	内面黒色土器	坏A II	須恵器	坏A III	坏B I	坏B III	坏B IV	坏A	灰釉陶器	埴C	埴E	皿A	皿B	皿D	耳皿		
古 第1段階 新																			前田遺期
																			野火付 9~15住 若宮 6住
																			五ヶ城9住 新沢1住
古 第2段階 新																			蛇塚B第2次
																			曾根城3住 5ヶ城3住
第3段階																			5ヶ城11住、 15住 第1・2号堅穴状
																			宿上屋敷5住 久保田15住 北西ノ久保 第2次 第1号 特殊遺構
第4段階																			蛇塚B第1次 1・4住 蛇塚B第2次 13住芝間 第1号 堅穴状遺構 北西ノ久保 第1次21・22住